

〔二二一〇〕法令全書  
明治十九年上卷

第一條 中學校ハ實業ニ就カント欲シ又ハ高等ノ學校ニ入ラント欲スルモノニ須要ナル教育ヲ爲ス所トス

第二條 中學校ヲ分チテ高等尋常ノ二等トス高等中學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬ス

第三條 高等中學校ハ法科醫科工科文科理科農業商業等ノ分科ヲ設クルコトヲ得

第四條 高等中學校ハ全國北海道沖繩ヲ除クヲ五區ニ分畫シ每區ニ一箇所ヲ設置ス其區域ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第五條 高等中學校ノ經費ハ國庫ヨリ之ヲ支辨シ又ハ國庫ト該學校設置區域内ニ在ル府縣ノ地方稅トニ依リ之ヲ支辨スルコトアルヘシ但此場合ニ於テハ其管理及經費分擔ノ方法等ハ別ニ之ヲ定ムヘシ

第六條 尋常中學校ハ各府縣ニ於テ便宜之ヲ設置スルコトヲ得但其地

方稅ノ支辨又ハ補助ニ係ルモノハ各府縣一箇所ニ限ルヘシ

第七條 中學校ノ學科及其程度ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第八條 中學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定シタルモノニ限ルヘシ

第九條 尋常中學校ハ區町村費ヲ以テ設置スルコトヲ得ス

(註) 明治十九年四月九日勅令第十五號「中學校令」

〔二二一一〕文部省第四年報  
第一冊

第一條 此學ハ小學教科卒業ノ女子ヲ教養ス其教科十二級ニ分チ六ヶ年ノ在學トス但シ即今女子ニシテ小學教科卒業ノモノ多カラサレハ教科書中姑ク近易ノ書ヲ加ヘ女子ノ粗書ヲ讀ミ算術ニ通スルモノヲ取テ之ヲ教授ス 第二條 各級六ヶ月ノ課程ニシテ一日四時半ノ課業トス 第三條 每級六ヶ月ノ終リニ試業ヲ行ヒ學力ノ進否ヲ判シ等級ヲ定ム而シテ學力進級スヘカラサルモノハ猶元級ニ留ルヲ法トス 第四條 教科中

英學ヲ加フルモノハ女子ニシテ親ク外國人ト語ヲ通シ博學明識ノモノト相交リ見聞ヲ廣大ナラシムルヲ要スルナリ 第五條此學ニ入ルモノ年齢十四歳以上十七歳以下タルヘシ但シ現今入學ヲ許スモノ小學教科卒業ノモノヲ必トセサレハ十四歳以下タリトモ入學ヲ許スコトアルヘシ 第六條教科卒業ノ後ハ大試業ヲ行ヒ卒業ノ證書ヲ與フ

(註) 「東京女學校年報」中教則條例

〔二二二二〕文部省第四年報  
第一冊

女學校ハ名古屋ニ一ヶ所アリ假ニ寺院ヲ以テ校舍ト爲シ其名ヲ女範校ト云フ學科ハ本科豫科ノ二科ニ分チ本科ハ教科ヲ十二級ニ分チ修學ノ期ヲ六ケ年トシ豫科ハ教科ヲ六級ニ分チ修學ノ期ヲ三ケ年トス本科生徒ハ滿十一歳ヲ以テ入學ノ期ト爲シ豫科生徒ハ滿十四歳以上十八歳以下ヲ以テ入學ノ期ト爲ス學科ノ目ハ本科ハ英語國語算術習字手藝ニシ

テ豫科ノ科目モ亦同シ語學ノ教師ハ英國ノ婦人マツクレランニシテ外ニ日本教師十人アリ生徒ハ六十人ノ定員ナレトモ目今ハ九十二人アリ此校ハ明治九年六月ノ開校ニシテ其時ヨリ本年四月マテノ經費二千五百五十圓ニ餘リタリト云フ

(註) 「第二大學區巡視功程」中愛知縣女學校の條

〔二二二三〕文部省第四年報  
第一冊

本場ノ教則ヲ分テ甲乙二科トス甲科ハ讀書算術乙科ハ裁縫紡織等ナリ課程ヲ分テ五級トス即チ下等三級上等二級ナリ 每級ヲ六ヶ月間ノ修業トス即チ上下等合セテ在學二年半ナリ 入場ノ生徒ハ小學下等教科ヲ卒業セシモノトス然レトモ方今其人ニ乏シキヲ以テ齡十三年以上ノ者ハ一般入場ヲ許ス但シ十五年以上ニシテ本場甲乙二科ノ内專ラ一科ノミヲ修メント欲スル者ハ之ヲ許スベシ 每級卒業試験ハ六ヶ月ノ末

十日間ノ内ヲ以テ之ヲ行フモノトス 卒業證書ハ每級之レヲ與フヘシ但シ下等教科卒業ノモノハ(甲科三枚乙科三枚)合セテ六枚ヲ與フ上等卒業ノ者モ亦然リ上下等卒業スル者ハ更ニ之ヲ通試シテ全科卒業ノ證書ヲ與フ專ハラ一科ヲ卒業スル者モ亦一科ノ證書ヲ與フベシ  
 入場ノ生徒ハ第一容儀ヲ整ヘ言辭ヲ柔カニシ場中ハ無論在宅ノ時ト雖モ輕噪ノ所作之レアル可ラス 衣服并ニ用具等ノ美惡ハ其家ノ貧富ニ因ルト雖モ務メテ華美ヲ去リ質素ヲ主トスベシ 用具ニ俳優ノ徽號ヲ印シ及ヒ其面貌ヲ貼スル等ハ堅ク之ヲ禁ス

(註) 「堺縣年報」中女工場教則及び生徒心得

〔二二一四〕 文部省第七年報

生徒ノ員數ヲ百五十名ト定ム 在學ノ期限ヲ三年トシ一年毎ニ前後二期ニ分チ每期六ヶ月ト定メ一週三十時即一日五時間ノ業ヲ修メシム

唱歌ハ他ノ課業時間ヲ斟酌シテ之ヲ授ク 手藝ハ第三年前期ヨリ修業セシムルモノト雖モ志願ニ由リテハ年齢ニ拘ラス正科時間ノ外之ヲ修メシムルコトアリ 學科 地學、史學、文學、修身、數學、物理、博物、畫學、化學、生理、經濟、記簿、教育學、習字、手藝、唱歌 本科志願者ノ學力不足ヲ補ハンカタメ豫科ヲ設ケ之ヲ三期ニ分チ讀書、文法、算術、習字、手藝ノ科ヲ教授ス

(註) 「栃木縣年報」中女子中學概況

〔二二一五〕 文部省第十一年報

十五年七月文部省ニテ當校内ニ附屬高等女學校ヲ設ケ其教則大旨ヲ定メラレ之ニ準據シ教則取調フヘキ旨ヲ達セラレタルニヨリ諸規則案取調ヘ十六年五月之ヲ文部省ニ稟請シ八月其裁可ヲ得テ九月ヨリ之ヲ實施セリ爰ニ其規則ノ要領ヲ略陳センニ通則、教授規則、試業規則、入學退學規則、生徒心得ノ五章ニ分チ教科ヲ下等上等ノ二科トナシ修業年限ハ下

等科ヲ三箇年上等科ヲ二箇年通シテ五箇年トセリ下等科ノ學科目ハ修身、讀書、作文、習字、算術、地理、本邦歴史、博物、物理、圖畫、裁縫、禮節、音樂、體操トシ上等科ノ學科目ハ下等科ノ修身、讀書、作文、習字、圖畫、裁縫、禮節、音樂、體操ノ續ニ化學、家政ヲ加ヘタルモノトス其學年學期ハ都テ本校ニ同シ

(註)「東京女子師範學校年報」中「高等女學校規則ノ事」

〔二二一六〕創立六十年

今般東京ニ於テ師範學校ヲ開キ候師範學校ハ小學ノ師範タルヘキモノヲ教導スル處ナリ全體人ノ學問ハ身ヲ保ツノ基礎ニシテ順序階級ヲ誤ラス才能技藝ヲ成長スルニアリ仍テ益々小學ヲ開キ人々ヲシテ務テ學ニ就カシムルノ御趣意ニ候處差向小學ノ師範タルヘキ人ヲ養ヒ候儀第一ノ急務ニ有之且外國ニ於テモ師範教育所ノ設ケ有之ニヨリ其意ヲ取リ外國教師ヲ雇ヒ彼國小學ノ規則ヲ取テ新ニ我國小學課業ノ順序ヲ定

メ彼ノ成法ニ因テ我教則ヲ立テ以テ他日小學師範ノ人ヲ得ント欲ス今立校ノ規則ヲ定ムル事左ノ如シ

- 一 外國人一人ヲ雇ヒ之ヲ教師トスル事
- 一 生徒二十四人ヲ入レ之ヲ師範學校生徒トスル事
- 一 別生徒九十人ヲ入レ之ヲ師範學校付小學生徒トスル事
- 一 教師ト生徒ノ間通辨官一人ヲ置ク事
- 一 教師二十四人ノ生徒ニ教授スルハ一切外國小學ノ規則ヲ以テスル事

一 二十四人ノ生徒ハ九十人ノ小學生徒ヲ六組ニ分チ其一組ヲ四人ニテ受持チ外國教師ヨリ傳習スル所ノ法ニ因リ彼ノレツテルハ我ノ假名ニ直シ彼ノオールドハ我ノ單語ニ改メ其外習字會話口授講義等一切彼ノ成規ニ依リ我ノ教則ヲ斟酌シテ之ヲ小學生徒ニ授ク右授受ノ間ニ一種良善ナル我小學教則ヲ構成スヘキ事

一 二十四人ノ生徒ハ和漢通例ノ書ヲ學ヒ得タル年齢二十歳以上ノ者タルヘシ然レトモ成丈ケ壯者ヲ選ムヘキ事(壬申六月七日文部省布達にて次の如く訂正—生徒ハ和漢通例之書及粗算術ヲ學ヒ得テ年齢二十歳以上ノ者タルヘシ然トモ成丈ケ壯者ヲ選ムヘキ事但試験ノ上入校差許スヘキ事)

一 生徒ハ都テ官費タルヘキ事

但二十四人ハ一ヶ月金拾圓宛九十人ハ一ヶ月金八圓宛ノ事

一 生徒入校成業ノ上ハ他途ヨリ出身スルヲ要セス小學幼年ノ生徒ヲ教導スルヲ以テ事業トスヘシ故ニ入校ノ節成業ノ上必ス教育ニ従事スヘキ證書ヲ出スヘキ事

一 成業ノ上ハ免許ヲ與ヘ速ニ之ヲ採用シ四方ニ分派シテ小學生徒ノ教師トスヘキ事

(註) 明治五年五月師範學校設立趣意書並規則書

〔三二一七〕學制

第三十九章 小學校ノ外師範學校アリ此校ニアリテハ小學ニ教ル所ノ教則及其教授ノ方法ヲ教授ス當今ニ在リテ極メテ要急ナルモノトス此校成就スルニ非サレハ小學ト雖モ完備ナル事能ハス故ニ急ニ此校ヲ開キ其成就ノ上小學教師タル人ヲ四方ニ派出セン事ヲ期ス

(註) 明治五年八月二日頒布、「大學」の條

〔三二一八〕 岐阜縣師範研習學校設置告示

今般管内各小學校ニ於テ教授スル所ノ教則ヲ一定センガ爲メ第一大學區東京師範學校規則ニ模倣シ師範研習學校開業ノ儀伺濟相成候ニ付テハ管内各校現今雇入ノ教員ハ勿論其他士民子弟有志ノ輩順次検査ヲヘテ入校指許候

(註) 明治六年十一月十日告示の一節

〔二二一九〕文部省第三年報  
第一冊

教員傳習所着手ハ明治八年四月酒田開校ヲ以テ始トシ宮城師範學校卒業生一名ヲ以テ各校教員傳習ニ從事セシメ六十日ヲ以テ卒業期トナスト雖其日月ヲ費スヤ甚久シク一時其急ヲ救フ能ハサルヲ以テ東京府講習所教員四名ヲ聘シ又鶴岡一校ヲ設ケ四五十日ヲ以テ下等小學卒業期トシ卒業スレハ則給料三圓及假免狀ヲ付シ其校ニ還付ス蓋現在教員タル者神官僧侶或ハ習字師等十ノ四五ニ居リ學力固ヨリ教員ニ任スルニ足ラスト雖姑ク之ヲ籠絡シ教授ニ從事其急ヲ救ハスンハ生徒曠日ノ歎ヲ抱ク而已ナラス教則ヲ擴張スル能ハス又子弟就學ノ妨碍タルモ知ル可ラス

(註) 「督學局年報」中鶴岡縣の條

〔二二一〇〕法令全書  
明治十四年

第一條 師範學校ハ小學校教員タルニ必須ノ學科ヲ授クル所トス

第二條 師範學科ヲ分テ初等中等高等ノ三トス

第三條 初等師範學科ハ修身、讀書、習字、算術、地理、物理、教育學、學校管理法、實地授業及唱歌、體操トス

但唱歌ハ教授法等ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ以下之ニ倣フ

第四條 中等師範學科ハ修身、讀書、習字、算術、地理、歷史、圖畫、生理、博物、物理、化學、幾何、記簿、教育學、學校管理法、實地授業及唱歌、體操トス

第五條 高等師範學科ハ修身、讀書、習字、算術、地理、歷史、圖畫、生理、博物、物理、化學、幾何、代數、經濟、記簿、本邦法令、心理、教育學、學校管理法、實地授業及唱歌、體操トス

第六條 師範學校ニ於テハ土地ノ情況ニ因リ某學科ノ程度ヲ斟酌シ農業、工業、商業等ヲ加フルヲ得殊ニ女子ノ爲ニハ本邦法令、經濟等ヲ除キ若クハ某學科ノ程度ヲ斟酌シテ裁縫、家事、經濟等ヲ加フヘシ

第七條 高等師範學科卒業ノ者ハ小學各等科ノ教員タルヲ得ヘク中等師範學科卒業ノ者ハ小學中等科及初等科ノ教員タルヲ得ヘク初等師範學科卒業ノ者ハ小學初等科ノ教員タルヲ得ヘキモノトス

第八條 師範學科ヲ修メントスル生徒ハ品行端正、體質強健、年齡十七年以上ニシテ小學中等科卒業以上ノ學力アル者タルヘシ

但年齡ハ土地ノ情況ニ因リ十五年以上トスルモ妨ケナシ又初等中學科卒業ノ者ハ高等師範學科第四年級ニ入ルコトヲ得

第九條 師範學校ノ修業年限ハ初等師範學科ヲ一箇年トシ中等師範學科ヲ二箇年半トシ高等師範學科ヲ四箇年トス

(註) 明治十四年八月十九日布達第二十九號「師範學校教則大綱」中

〔二二二二〕法令全書  
明治十九年上卷

第一條 師範學校ハ教員トナルヘキモノヲ養成スル所トス

但生徒ヲシテ順良信愛威重ノ氣質ヲ備ヘシムルコトニ注目スヘキモノトス

第二條 師範學校ヲ分チテ高等尋常ノ二等トス高等師範學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬ス

第三條 高等師範學校ハ東京ニ一箇所尋常師範學校ハ府縣ニ各一箇所ヲ設置スヘシ

第四條 高等師範學校ノ經費ハ國庫ヨリ尋常師範學校ノ經費ハ地方稅ヨリ支辨スヘシ

第五條 尋常師範學校ノ經費ニ要スル地方稅ノ額ハ府知事縣令其豫算ヲ調整シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第六條 師範學校長及教員ノ任期ハ五箇年トス滿期ノ後猶ホ繼續スルコトアルヘシ

第七條 尋常師範學校長ハ其府縣ノ學務課長ヲ兼ヌルコトヲ得

第八條 師範學校生徒ノ募集及卒業後ノ服務ニ關スル規則ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第九條 師範學校生徒ノ學資ハ其學校ヨリ之ヲ支給スヘシ

第十條 高等師範學校ノ卒業生ハ尋常師範學校長及教員ニ任スヘキモノトス但時宜ニ依リ各種ノ學校長及教員ニ任スルコトヲ得

第十一條 尋常師範學校ノ卒業生ハ公立小學校長及教員ニ任スヘキモノトス但時宜ニ依リ各種ノ學校長及教員ニ任スルコトヲ得

第十二條 師範學校ノ學科及其程度并教科書ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

(註) 明治十九年四月九日勅令第十三號「師範學校令」

〔二二二二〕 文部省第六年報

本邦教育ノ方法ハ專ラ智育ノ一方ニ傾向シテ體育ノ諸術ハ概ネ之ヲ放

着シテ復タ其利害ヲ唱フル者ナキカ如シ故ヲ以テ其弊ヤ漸ク心身兩全ノ道ヲ缺キ青年子弟ノ氣力ヲシテ次第ニ減縮セシメ又隨テ國家ノ元氣ヲ衰頽セシムルニ至ルハ蓋シ必然ノ勢ナリ是ニ於テカ明治十一年十月東京府下ニ文部省所轄體操傳習所ヲ創出シ體育學ノ教員ヲ米國麻沙土設州ヨリ聘致シ以テ體操ノ方法ヲ撰定セシメタリシカ當時創始ノ際未タ募集ノ生徒アラサルヲ以テ先ツ之ヲ東京女子師範學校ノ生徒ニ實施シ以テ其術ノ適否如何ヲ試ミシニ稍々其效アリトス抑々從來府縣ノ諸學校ニモ亦此科ノ設ナキニアラスト雖モ之ヲ要スルニ多クハ軍式ノ體操ニシテ夫ノ體力ヲ補養シ心氣ヲ旺盛ニシテ學業進步ノ益ヲ收ムルニ至リテハ其功未タ充分ナラサル所アリ又世人或ハ擊劍等ノ武技ヲ以テ至良ノ術トナシ之ヲ學校ニ施行セント欲スル者アリト雖モ是レ亦特ニ防護ノ主義ニシテ未タ以テ身體ノ發育ヲ主トスル完全ナル體操法ニ比スヘカラサルナリ望ラクハ此ノ完全ナル體育學ノ良績ヲ實際ニ得テ將



來我カ國民ノ心體ヲ育成シ以テ全國ノ元氣ヲ振起セシメンコトヲ

(註) 「體操傳習所」の條

〔二二二三〕文部省第五年報  
第一冊

文部省所轄東京開成學校東京醫學校開設以降各府縣モ亦專門學校ノ開設アリ然レトモ其數猶寡少ニ屬セリ爾後文運漸ク進ミ人知稍闡クルニ隨ヒ其數大ニ増加セリ乃本年ニ於テハ公私專門學校五十二箇ヲ見ル而シテ教員一百六十一名アリ其生徒ノ數三千三百六十一名之ヲ文部省所轄東京大學ノ生徒一千七百五十名ニ合算スルトキハ專門學ヲ修習スルモノ計五千一百一十一名ニ至レリ今地方專門學校ノ學科ヲ舉クレハ法律學醫學農業學商業學航海學化學數學畫學等トシ其內數學最多ク醫學之ニ亞キ商業學又之ニ亞ク但醫學ノ公立ニ係ルモノハ其規模頗ル觀ル可シト雖商業學數學ニ至テハ一二學校ノ嶄然タルモノヲ除クノ外大率

商估ノ子弟ニ淺近ノ課業ヲ授クルノ類ニシテ未タ之ヲ以テ悉ク高尙ナル專門學校ト同視ス可ラス蓋學科ノ多々ナル固ヨリ此ノ僅々ナルモノニ止マラサレハ四方ノ俊才益其學地ヲ占領シ之ヲ擴充スルノ秋ニ及テハ猶無涯ノ新版圖ヲ發見シ無數ノ教員生徒ヲ表出スルノ満足ヲ得ヘキナリ

(註) 「專門學校」の條

〔二二二四〕文部省第五年報  
第一冊

外國語學校ノ數二十八箇内官立二箇公立五箇私立二十一箇其學科ニ就テ之ヲ種別スレハ佛獨露清ノ四語學ヲ授クルモノ一箇英語學二十五箇獨語學清語學各一箇アリ之ヲ前年ニ比較スレハ六十四箇ヲ減少ス其教員ノ數内國人男八十一名女一名外國人男二十二名女五名計一百零九名生徒ノ數男一千四百零二名女一百二十名アリ之ヲ前年ニ比較スレハ内

國教員二百九十八名外國教員三十五名生徒男四千四百二十三名女三百四十七名ヲ減少セリ此ノ如ク學校數及教員生徒數ノ頓ニ減少ヲ致セシ所以ハ明治十年二月文部省所轄愛知英語學校廣島英語學校長崎英語學校新潟英語學校宮城英語學校及東京女學校ヲ廢止シ且東京英語學校ヲ東京大學ニ隸シテ豫備門トナシ又各地方ニ於テモ中學校ノ設置漸ク増加シ其學科ノ利便ニ涉レルヲ以テ遂ニ外國語學ノ生徒ヲシテ中學校ニ轉入セシメタルニ原由セリ加之外國語學ハ都會若クハ開港場ノ如キ繁盛殷阜ノ地ニ在テハ其功用ノ許多ナルモ未タ人民一般ノ求需ニ適切ナルモノニ非ルヲ以テナリ

茲ニ外國語學校ノ官立公立ニ私立係レルモノヲ臚舉スレハ官立ハ文部省所轄東京外國語學校大阪英語學校ノ二箇ニシテ公立ハ京都府下英語學二箇獨語學一箇愛知縣下新潟縣下英語學各一箇アリ私立ハ大阪府下英語學四箇清語學一箇和歌山縣下英語學三箇京都府下千葉縣下愛知縣

下青森縣下英語學各二箇神奈川縣下群馬縣下靜岡縣下長崎縣下山形縣下英語學各一箇アリ

(註) 「外國語學校」の條

〔二二二五〕 中村正直傳

先生の靜岡に在る、諸藩書生の來りて學ぶもの甚だ多く、先生の東上するや、亦從ひ上り、加之都下の學生、先生の徳を慕ひて、入門を請ふ者あり、因て六年二月、家塾を邸内に設け、始めて生徒を教育せり、名けて同人社といふ、之を先生の明治の教育界に大貢獻せる萌芽となす、初め、先生著譯書を刊行する、發行部數の多大なる、實に意想外に在り、従つて、出版費を償却して、猶剩す所數萬金に上る、是を以て塾生の未だ多からざるにも關せず、當時築地に居留したりし英國人藥劑師ポート氏、後ち同人の弟を呼びよせて、代らしむを聘し、只、高給を拂ふのみならず、住宅より賄費迄支辨して、優遇

以て英語科を教授せしめ、讀本文典・地理・歴史等の諸科は、之を高定弟子に委し自ら高等英語の譯讀、及び、作文の刪正に任ず、されば、日を経るに従ひ、入塾を懇請する者漸く多く、生徒常に數百人、江戸川の流れ清く林樹鬱蒼たる間、日夕諷誦の聲絶えること無し、

(註) 「同人社の開設」の條

〔二二二六〕 近藤翁略傳

明治二年十月兵部省ノ徵スル所ト爲リテ上京シ海軍操練所出仕ヲ命ゼラレ後二年累進シテ海軍中佐兼兵學中教授ニ任ジ從六位ニ叙セラル先  
生ノ上京スルヤ舊門人ノ來テ教ヲ請フ者アリ又新タニ先生ノ門ニ入ラ  
ンコトヲ願フ者アリ乃チ麴町鳥羽藩邸内ノ自宅ニ於テ公務ノ餘暇ニ業  
ヲ授ク明治二年十一月築地海軍操練所用地元一橋邸内ニ官宅ヲ賜フ兵  
部省特ニ生徒ノ授業及ビ寄宿ニ便ゼンガ爲メニ濶大ノ連房ヲ以テス此

時始テ攻玉ヲ以テ塾ニ命ズ他山ノ石以テ玉ヲ攻ム可シト云フノ意ニ取  
ル本山漸田中義廉ノ二君亦私ニ塾ヲ開キ子弟ヲ教フ共ニ生徒ノ増減等  
皆コレヲ兵部省ニ具狀シ恰モ海軍操練所豫備校ノ狀アリ降テ明治四年  
三月ニ至リ芝新錢座町ノ費舎ヲ福澤諭吉君ヨリ購ヒ其四月廿六日ヲ以  
テ此ニ移ル(後回祿ニ遭ヒ新ニ今ノ費舎及ビ教場ヲ築ク明治六年博覽會  
一級事務官ヲ命ゼラレ埃國ニ航シ既ニシテ歸朝ス時ノ著述ニ係ル者埃  
國博覽會見聞録、子育の卷、埃行日記、颶風覽要等アリ我國ノ洋書ヲ講ズル  
者直譯ノ法宜キヲ得ズ往々迂遠ニ失シ原意ヲ害フノ譏ヲ免ヌカレザル  
者アリ先生之ヲ憂フルコト久シ其埃國ニ航スルノ前年自ツカラ直譯ノ  
模範ヲ立テ之ヲ徒弟ニ授ク先生常ニ海員ヲ養成シ以テ我國航海ノ業ヲ  
盛ナラシメムト欲スルノ念一日モ已マズ是ヲ以テ明治八年攻玉社本費  
ノ外別ニ航海測量習練所(後名ヲ商船費ト更ム)ヲ設ク

(註) 攻玉社設立の條

〔二二二七〕 文部省第六年報

此私學ハ明治五年ノ冬創立スル所ニシテ津輕郡弘前ニ在リ學校長ヲ本多庸一ト云ヒ結社人主務ヲ菊地九郎ト云フ舊藩ノ軍事局ヲ用ヒテ校舍トス此校ハ中學小學ノ學科ヲ兼ネ教フル者ニシテ其中學ノ教則ハ全學期ヲ五ケ年トシ其内初ノ三年ヲ下等學期トシ後ノ二年ヲ上等學期トス五年ノ外猶豫備科ノ學期二年アリ豫備ノ學科ハ讀物物理博物文法英語算術習字作文唱歌體操ニシテ下等中學ハ史學數學脩身英語文法地學作文習字畫學體操ヲ教へ上等中學ハ漢文英語史學數學作文記簿物理經濟博物化學ヲ學ハシム上等ノ史學ハギゾーノ文明史ヲ用ヒ數學ハ代數幾何三角法ニ至ル教師ハ亞米利加人ダブリューデビスン夫妻首座ト爲リテ邦人數名之ヲ助ク授業ハ多ク英語ヲ用フ生徒ハ上等中學生七人下等中學生二十三人豫備生四十八人アリ又小學ハ縣下一般ニ行ハル、者ト其教則ヲ同クシテ生徒ハ下等第一級以下二百二十一人アリ又此校ヨリ

ハ米國留學生三人ヲ出セリ

(註) 「學區巡視功程」中、青森縣東奥義塾の條

〔二二二八〕 文部省第十年報

鳥取縣伯耆國久米郡倉吉ニ農學校一箇アリ明治十四年五月ヲ以テ創立スル所ニシテ久米河村兩郡ノ共立ニ係ルヲ以テ久米河村農學校ト稱ス而シテ其設置ノ目的ハ泰西ノ農事ヲ講究シ以テ農業ヲ改良シ益々物産増殖ノ基礎ヲ謀ルニアリ生徒ハ公費生ヲ二十名トシ賄料トシテ每生一ケ月金貳圓五拾錢ヲ給與ス其他私費生ハ郡内及郡外ノ二部ニ區別シ公費生ハ通例校內ニ寄宿シ中途退學スルヲ許サス而シテ入學生徒ハ凡テ滿十四年以上ニシテ普通ノ文字ヲ書讀シ得ル者トス

本校ハ翻譯書并ニ農業講義筆記普通算術等ヲ授クルヲ主旨トス而シテ其學期ハ二年ニシテ之ヲ六期ニ分ツ其科目ハ第一年第一期博物學、埋渠

法、農具論、數學、實驗、同第二期糞培法、蔬菜培養、數學、實驗、同第三期果實栽培、五穀、數學、實驗、第二年第一期有益植物、養蠶法、牧草、數學、實驗、同第二期牧牛學、樹林學、數學、實驗、同第三期牧馬學、蜜蜂、農業化學、數學、實驗トス教員一名生徒ハ第一年第一期生二十名アリ

(註) 「學事巡視功程」中、島根縣農學校の條

〔二二二九〕文部省第十年報

當所創設ノ計畫ハ實ニ昨十四年二月ニ在リテ熊本縣ヨリ馬耕授業師ヲ雇ヒ來リ從來本縣下ニ行ハル、所ノ耕作法ヲ改良セント謀リシヲ濫觴トス而シテ同年七月東京駒場農學校卒業生ヲ聘シテ教則規則ヲ設ケ假ニ教場ヲ開ク次テ本年一月其位置ヲ甲府舊城内ニトシ各郡ニ募リテ校費生徒九名入學セシメ同七月始メテ昇級試驗ヲ行ヒ更ニ新募生徒八名ヲ入學セシム同十一月規則認可ヲ得之ヲ實施シ且職務章程生徒訓條等

ヲ定ム是ニ於テカ諸般ノ規模大ニ整頓セリ當所經費ハ地方稅ノ支辨ニ係リ教員學力ハ東京駒場農學校卒業生一名元勸農局下總牧羊場牧羊科及實地農藝ヲ修メシモノ一名小學高等科教員免許狀ヲ有スル者一名都合三名トス學科ヲ本科豫科ニ分チ本科ハ農學ヲ主トシ化學、植物、動物、代數、物理、獸醫等ノ諸科トシ且農場ニ就テ實習ヲ爲サシム豫科ハ本科ニ入ル階梯ニシテ文學、地理、物理、算術、畫學、英學等ノ諸學科ヲ教授ス別ニ又農藝特科ナルモノヲ置キ生徒ノ情願ニ由リ馬耕科、葡萄酒釀造科及混同農藝科等ヲ教授スルモノトス

(註) 「山梨縣年報」中「農事講習所」の條

〔二二三〇〕法令全書  
明治十六年

第一條 農學校ハ此通則ニ遵ヒ農ノ學業ヲ教授スル所トス

第二條 農學校ハ之ヲ分テ第一第二ノ二種トス第一種ハ主トシテ躬ヲ

善ク農業ヲ操ルヘキ者ヲ養成スル爲メ上款ニ遵ヒ之ヲ設置スルモノトス第二種ハ主トシテ善ク農業ヲ處理スヘキ者ヲ養成スル爲メ下款ニ遵ヒ之ヲ設置スルモノトス

第三條 農學校ニ於テハ殊ニ本邦ノ農事ニ就キ第一種ハ主トシテ實業ヲ授ケ第二種ハ學理ト實業トヲ並ヒ授クルヲ要ス且實驗ノ用ニ供スルニ足ルヘキ田圃等ノ準備アルヲ要ス

第四條 第一種農學校ノ學科ハ左ニ掲クル諸目トス  
修身 算術幾何 物理 化學 動植物 耕種 養畜 農業經濟  
農業簿記

但土地ノ情況ニ因リ本文某科目ノ程度ヲ斟酌シ若クハ斟酌セスシテ特ニ園藝、森林、開墾、養蠶、養魚、桑、茶、綿、麻、楮、藍、漆、檀、甘蔗、蘆粟、葡萄、煙草等ノ耕種法、製茶法、製糖法、農產物貯法、肥料製造法等ノ某科目ヲ置クコトヲ得

第五條 第一種農學校ノ修業年限ハ二箇年トス、

但此年限ヲ一年以内増加スルコトヲ得

第十一條 第二種農學校ノ學科ハ左ニ掲クル諸目トス

修身 代數、幾何、三角法 圖畫 物理學 化學 動物學 植物學  
地質學 農用化學 農用工學 耕種 養畜 農業經濟 農業簿記  
農事法規

但土地ノ情況ニ由リ本文某科目ノ程度ヲ斟酌シ若クハ斟酌セスシテ特ニ園藝、森林、開墾、獸醫、昆蟲學等ノ某科目ヲ置キ又養蠶、養魚、桑、茶、綿、麻、楮、藍、漆、檀、甘蔗、蘆粟、葡萄、煙草等ノ耕種法、製茶法、製糖法、農產物貯法、肥料製造法等ノ某科目ヲ置クコトヲ得

第十二條 第二種農學校ノ修業年限ハ三箇年トス

但此年限ヲ一年以内増加スルコトヲ得

(註) 明治十六年四月十一日文部省達第五號「農學校通則」

〔二二三〕法令全書  
明治十七年

第一條 商業學校ハ此通則ニ遵ヒ商ノ學業ヲ教授スル所トス

第二條 商業學校ハ之ヲ分テ第一第二ノ二種トス第一種ハ主トシテ躬  
ラ善ク商業ヲ營ムヘキ者ヲ養成スル爲メ上款ニ遵ヒ之ヲ設置スルモ  
ノトス第二種ハ主トシテ善ク商業ヲ處理スヘキ者ヲ養成スル爲メ下  
款ニ遵ヒ之ヲ設置スルモノトス

第三條 商業學校ニ於テハ商業諸般ノ取引事務ヲ演習スルニ足ルヘキ  
商業實習室ノ準備アルヲ要ス

第四條 第一種商業學校ノ學科ハ左ニ掲クル諸目トス

修身 讀書 習字 算術 簿記 商業書信 商業地理 商品  
商業經濟 商業實習

但土地ノ情況ニ由リ本文某科目ノ程度ヲ斟酌シ若クハ斟酌セス  
シテ特ニ銀行、爲替、運輸、保險、會社、圖畫、物理等ノ某科目ヲ置キ又英、

佛、獨、支那、朝鮮等ノ某語ヲ置クコトヲ得

第五條 第一種商業學校ノ修業年限ハ二箇年トス

但此年限ヲ一年以内増加スルコトヲ得

第十一條 第二種商業學校ノ學科ハ左ニ掲クル諸目トス

修身 和漢文 習字 算術、代數 簿記 商業書信 商業地理  
圖畫 商品 商業經濟 商業史 商事法規 商業實習 英語

但土地ノ情況ニ由リ本文某科目ノ程度ヲ斟酌シ若クハ斟酌セス  
シテ特ニ銀行、爲替、運輸、保險、會社法、海上法、契約法、關稅、統計、物理、化  
學、博物、幾何、機械、工藝誌等ノ某科目ヲ置キ又本文英語ノ外若クハ  
英語ニ代ヘテ佛、獨、支那、朝鮮等ノ某語ヲ置クコトヲ得

第十二條 第二種商業學校ノ修業年限ハ三箇年トス

但此年限ヲ一年以内増加スルコトヲ得

(註) 明治十七年一月十一日文部省達第一號「商業學校通則」

〔二二二二〕法令全書  
明治三年

學制 輦轂ノ下大學一所ヲ設ケ府藩縣各中小ノ學ヲ置ク皆大學ヨリ頒  
ツトコロノ規則ヲ遵守シ材ヲ育シ業ヲ廣メ國家ノ用ニ供スルヲ以テ務  
トス而シテ大學ハ人文淵藪才德ノ成就スルトコロ之ニ入ラントスル者  
必ス先ツ其地方ノ者ノ課ヲ歷諸學漸ク熟シテ始テ輦下ニ貢進スルヲ獲  
ナリ

貢法 生徒凡ソ三十歳以下ヲ限リ其地方ノ考課ヲ歷知事證憑ヲ予ヘ輦  
下ニ貢進スルモノ之ヲ大學生ニ補シ各自好ムトコロノ科業ニ就キ博士  
助教ノ指揮ヲ受ケシム在學三年ヲ期トシ期滿ツル時ハ解額セシメ更ニ  
新ナル者ヲ以テ之ニ補ス若クハ在學中撰任セラレ、者アレハ隨テ定額  
ノ人員ヲ貢進ス其定員ノ如キハ之ヲ後議ニ附ス

試法 試藝對策ノ法ヲ立テ春秋ノ二仲月預メ日ヲ剋シ其臧否ヲ對試シ  
優等甲科ニ登ルアラハ各其條件ニ就キ反覆討論ヲ遂ケ言行相符スル者

ヲ判定シ狀ヲ具シ申奏シ以テ廊廟ノ採擇ニ充ツ

學費 府藩縣管內石高二應シ公納セシム其定額ノ如キハ之ヲ後議ニ附  
ス

學科 教科 神教學、修身學

法科 國法、民法、商法、刑法、詞訟法、萬國公法、利用厚生學、典禮學、政治學、國勢  
學

理科 格致學、星學、地質學、金石學、動物學、植物學、化學、重學、數學、器械學、度量  
學、築造學

醫科 豫科、數學 度量、格致學、化學 鑛土植物學

本科、解剖學、藥物學、原病學  
病屍剖驗學 醫科斷診法、內科外科及雜科治療學兼攝生法

文科 紀傳學、文章學、性理學

(註) 明治三年二月「大學規則」



〔二二三三〕太政官日誌  
明治三年第二十九號

大學南校ニ於テ外國教師御雇相成人材成育被爲在候間藩々ニ於テ

現高拾五萬石以上 三人

同 五萬石以上 二人

同 五萬石未滿以下 一人

右之通十六歳以上二十歳迄人材相選來ル十月迄ニ南校へ可差出候尤年限學費等之儀ハ南校ニテ可承合事

但是迄南校入舍之内其選ニ當候者有之候ハ、差加へ不苦候事

(註) 明治三年七月二十七日布告

〔二二三四〕學制

第三十八章 大學ハ高尚ノ諸學ヲ教ル專門科ノ學校ナリ其學科大略左ノ如シ

理學 化學 法學

醫學 數學

第四十二章 大學校教員ハ學士ノ稱ヲ得シモノニ非サレハ許サス

(註) 明治五年八月二日頒布、「大學」及「教員ノ事」の條

〔二二三五〕文部省第五年報  
第一冊

東京開成學校東京醫學校ハ開設以來稍年所ヲ經體制漸ク備ハルヲ以テ明治十年四月之ヲ合併シテ東京大學ト改稱シ其法學部理學部文學部ヲ舊東京開成學校ニ置キ其醫學部ヲ舊東京醫學校ニ置ケリ而シテ東京英語學校ハ原ト東京開成學校ニ進入スヘキ生徒ニ豫備學ヲ授クルノ地タルヲ以テ之ヲ東京大學豫備門ト改稱シテ大學ニ隸シ又教育博物館所轄小石川植物園ヲ更メテ大學ニ隸セリ今大學ノ梗概ヲ記セントスルニ際シ其處務ノ實際ニ由リ之ヲ法理文三學部醫學部ノ二箇ニ區別スヘシ

法理文三學部ノ當學年(九年九月十一日ニ始ル)ニ於ル小石川植物園ヲ管理シ圖書館及講義室ヲ建設シ或ハ圖書課ヲ擴張シ法學生ニ現行ノ法律ヲ講究セシムルノ類其生徒ニ便益ヲ與ルモノ尠シトセス且其法理文ノ三學部ヲ分ツヤ従前ノ法學科生ヲ法學部ニ屬セシメ工學化學物理學科生ヲ理學部ニ屬セシム但文學部ハ新置ニ係ルヲ以テ未タ事跡ノ載スヘキモノナシ今三學部ニ於テ修習スル生徒ノ數共計七百一十名内本科生其上級ニ在ル者三名其中級ニアル者二十九名其下級ニアル者四十八名計八十名之ヲ前年ニ比較スレハ其増加四十五名ニシテ化學上級ノ卒業生三名アルヲ得タリ蓋卒業生ノ數如此ハ甚僅少ナルニ似タリト雖明治八年九年ノ兩年内ニ於テ優等ノ生徒二十一名ヲ遴選シテ之ヲ海外ニ留學セシメ而シテ其留學生ハ各所ノ大學ニ於テ順次其業ヲ卒リ得業士或ハ學士ノ稱號ヲ得タル者殆ト十數名アレハ則未タ遽カニ其數甚僅少ナリト速了ス可カラサルモノアリ其他本科中級生ノ如キハ其學業漸ク進

步シテ法學生七名化學生九名工學生四名物理學生六名ハ既ニ本科第二年ノ課程ヲ踐履シ次學年ノ終ニ於テ第三年ノ課程即全科ヲ卒業スルヲ得ヘク其下級生中法學生一十二名化學生工學生各一十一名物理學生一十四名ノ如キモ亦本科第一年ノ課程ヲ踐履セシヲ以テ直ニ中級ニ登ルヲ得ヘシ又東京開成學校舊來ノ豫科生徒一百八十六名豫備門生徒四百四十四名計六百三十名アリテ其内本科ニ進入ス可キ者八十名アリ教員ノ數ハ內國人三十二名外國人二十四名計五十六名ニシテ該學部一歲ノ費金ハ二十三萬八千四百八十六圓三十八錢五厘ナリ

醫學部ハ其生徒ヲ分テ醫學生製藥生ト爲シ共ニ本科豫科ノ別アリ其教則ハ明治六年制定セル者ニ據リテ之ヲ踐履セリ明治九年十月始テ醫學及製藥學ノ速成ヲ期センカ爲ニ簡易ノ教則ヲ設ケ通學生ノ教場ヲ開キシヨリ當學年(九年十一月十六日ニ始ル)中通學生ノ入學ヲ得ルモノ二百九十三名アリ又明治十年三月東京外國語學校ノ獨逸語學生徒及醫學志

願ノ者ニ臨時入學ヲ許セシニヨリ其入學ヲ得ルモノ二百八十五名アリ齊ク之ヲ醫學豫備生ト稱セリ此等ノ生徒ト從前入學ノ生徒トヲ合算スレハ計一千零四十名アリ而シテ生徒ノ實地考驗ニ供スルニハ附屬醫院アリ文庫アリ解剖所アリ植物場アリ器械及動植物標本等アリテ其用具モ亦乏シカラスト謂フ可シ今生徒學業進歩ノ狀況ヲ舉示スレハ醫學本科二等生二十二名三等生二十五名四等生五十六名五等生三十一名豫科生ノ三等ヨリ一等ニ在ル者一百六十七名豫備生二百九十四名其他通學生三百六十三名製藥學本科二等生一十二名三等生九名其他通學生六十一名アリ而シテ其本科一等生ヲ缺ク所以ハ當學年中ニ在リテ製藥學生ノ卒業セシ者一十一名醫學本科一等生ノ陸軍軍醫副ニ任セシ者六名下醫教授ニ從ヒ其介補トナル者ニ任セシ者一名アルニ原由セリ此等ノ生徒ハ皆悉ク卒業ニ係ラスト雖既ニ其選舉ヲ經テ軍醫副タリ下醫タルノ任ニ堪ヘタルヲ見レハ其學業ノ非凡ナルヲ推知スヘキノミ嗚呼卒業生

徒ノ陸續相繼キ各其修得スル所ヲ將テ之ヲ實施スルノ期ニ屆リシハ大學ノ爲ニ光輝ヲ添ル者ト謂フモ敢テ溢美ニ非サルヲ信ス

教員ノ數内國人二十四名外國人一十一名醫員ノ數二十二名アリ又本年中附屬醫院入室患者ノ數八百三十六名外來患者ノ數四千二百九十名計五千一百二十六名死體解剖ノ數一百一十七箇ニシテ該學部一歲ノ費金ハ一十三萬六千七百八十九圓二十七錢ナリ

(註)「大學」の條

〔二二三六〕法令全書  
明治十九年上卷

第一條 帝國大學ハ國家ノ須要ニ應スル學術技藝ヲ教授シ及其蘊奧ヲ  
攻究スルヲ以テ目的トス

第二條 帝國大學ハ大學院及分科大學ヲ以テ構成ス大學院ハ學術技藝ノ蘊奧ヲ攻究シ分科大學ハ學術技藝ノ理論及應用ヲ教授スル所トス

第三條 分科大學ノ學科ヲ卒へ定規ノ試験ヲ經タル者ニハ卒業證書ヲ授與ス

第四條 分科大學ノ卒業生若クハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ニシテ大學院ニ入り學術技藝ノ蘊奧ヲ攻究シ定規ノ試験ヲ經タル者ニハ學位ヲ授與ス

第五條 帝國大學職員ヲ置ク左ノ如シ

總長 勅任

評議官

書記官 奏任

書記 判任

第六條 帝國大學總長ハ文部大臣ノ命ヲ承ケ帝國大學ヲ總轄ス其職掌ノ要領ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一 帝國大學ノ秩序ヲ保持スル事

第二 帝國大學ノ狀況ヲ監視シ改良ヲ加フルノ必要アリト認ムル事項ハ案ヲ具ヘテ文部大臣ニ提出スル事

第三 評議會ノ議長トナリテ其議事ヲ整理シ及議事ノ顛末ヲ文部大臣ニ報告スル事

第四 法科大學長ノ職務ニ當ル事

第七條 評議會ハ便宜ニ從ヒ帝國大學若クハ文部省ニ於テ開設ス評議會ノ議ニ付スヘキ事項左ノ如シ

第一 學科課程ニ關スル事項

第二 大學院及分科大學ノ利害ノ銷長ニ關スル事項

第八條 評議官ハ文部大臣各分科大學教授ヨリ各二人ヲ特選シテ之ニ充ツ

第九條 評議官ハ五箇年ヲ以テ任期トス任期满ツルノ後時宜ニ依リ更ニ勤績ヲ命スルコトアルヘシ

第十條 分科大學ハ法科大學醫科大學工科大學文科大學及理科大學ト  
ス

法科大學ヲ分テ法律學科及政治學科ノ二部トス

第十一條 各分科大學職員ヲ置ク左ノ如シ

長 奏任

教頭 奏任

教授 奏任

助教授 奏任

舍監 奏任

書記 判任

第十二條 分科大學長ハ教授ヨリ特選シテ之ニ兼任ス

分科大學長ハ帝國大學總長ノ命令ノ範圍内ニ於テ主管科大學ノ事務  
ヲ掌理ス

第十三條 各分科大學ノ教頭ハ教授ヨリ特選シテ之ニ兼任ス

教頭ハ教授及助教授ノ職務ヲ監督シ及教室ノ秩序ヲ保持スルコトヲ  
掌ル

第十四條 各分科大學ノ教授助教授ノ人員ハ其學科ノ輕重及學生ノ員  
數ニ應シテ別ニ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

(註) 明治十九年三月一日勅令第三號「帝國大學令」

〔二二三七〕法令全書  
明治三年

一、教典誦讀講談之節ハ禮服着用威儀ヲ敬慎スヘキ事

一、己ヲ修メテ然ル後ニ人ヲ教フヘク己ヲ正クシテ然ル後ニ人ヲ正スヘ  
シ是故ニ其身ニ於テ眞ニ皇祖ノ大道ヲ昭明ニシ眞ニ皇祖ノ大教ヲ尊  
信シ死生不惑神明ニ依頼シ我カ言行ヲ敬慎シ身ヲ以テ天下衆庶ノ先  
導タラン事ヲ志願ス可シ是レ緊要ノ第一義也

一、大命ヲ奉承シ諸國ニ巡行シ其境ニ至リ其所ノ管轄府藩縣ノ吏士ニ會シ案内ニ應シ教諭スヘキ所ニ至リ神職村長町老以下男女ニ限ラス其人員ヲ計リ日割ヲ以テ會集セシメ教典ヲ誦讀シ講談誘導懇切ヲ盡スヘキ事

(註) 明治三年四月二十三日「宣教師心得書」の抜萃

〔二二三八〕太政官日誌  
明治八年第二號

曩ニ教導職ノ輩力ヲ戮セ貲ヲ捐テ大教院ヲ輦下ニ創立ス爾來拮据歳ヲ閱スル三周各府縣下モ亦之ニ倣ヒ既ニ中小教院ヲ設クル者二百八十有九是教導職黽勉ノ力ニ之レ由ル而シテ大教正以下權訓導ニ至ル其職ニ在ル者七千二百四十又七名神道各宗其道タル固ヨリ同カラスト雖モ今ヤ一ニ教則ニ遵ヒ偏ニ政治ヲ翼賛センコトヲ圖ル願フニ其效必ス觀ル可キ者アラン

(註) 明治八年一月四日、教部大輔突戶璣奏聞の一節

〔二二三九〕往事錄

明治六年の春、薩人森有禮氏(米國辯理公使)米國より歸り、横山孫一郎を介して余に面會を求む、時に森氏は木挽町六丁目高島徳右衛門の家に寓せり、森氏曰ふ、米國にては學者は各其學ぶ所に從ひ、學社を起して以て互に學術を研究し、且講談を爲して世人を益す、本邦の學者は何れも孤立して互に相往來せず、故に世の益をなすこと甚少なし、余は本邦の學者も、彼國の學者の如く互に學社を結び、集會講究せんことを望む、且本邦近年國民の道德衰頹して、其底止する所をしらず、是を救濟するは老學士を措きて他にあるべからず、故に今一社を結び、一は學問の高進を謀り、一は道德の模範を立んと欲すと、余其事の可なるを賛す、因て兩人相議して都下の名家に謀らんことを約す、則ち福澤諭吉氏、中村正直氏、加藤弘之氏、津田真道

氏、西周氏、箕作秋坪氏に謀る、諸氏皆同意を表す、依て初めて相會して談話討論し、又政事學術等の談話を公衆に聽かしめんとし、一月に一回演說會を精養軒(洋食店)の樓上に開く、是本邦演說會の始なり、此會を名けて明六社といふ、明治六年に創設したるを以てなり、此頃まで本邦の學者は、其知識皆和漢の二學に限りて、西洋の事を知るものなし、明六社の説く所は多く西洋の新説なるを以て、官員學者來聽する者甚多し、尋て雜誌を發行し是を明六雜誌といふ、是本邦雜誌の始なり、

(註) 明治六年の條の一節

〔二二四〇〕近事評論  
第百六十四號

演舌ノ人ヲ感動セシムル其勢力實ニ重大ナルモノアリ三寸ノ舌頭時ニ一國ノ治亂興敗ニ係ルモノ歐米諸國其例ニ乏シカラズデモツセス氏ノ雅典ニ於ルバトリツキヘヌリーノ亞米利加ニ於ケルガ如キ是ナリ我

邦往時演舌ノ盛ニ行ハレシコトナシ隨テ其勢力ヲ逞フセシコトヲ聞カズ只ダ落語家、講談師ノ如キ頗ル下等社會ニ向ツテ勢力ヲ有シ兼テ教育ノ一部トナリシコトアリ近年學者紳士ノ間ニ於テモ演說ノ重要ナルコトヲ知り自ラ之ヲ習練スルモノアリ好ンデ之ヲ聽聞スルモノアリ一時翕然トシテ都下ニ行ハレ續テ諸縣ニ布洽セントス洵ニ嘉賞スベキノ至ナラズヤ

余輩ハ其嘉賞スベキモノ、中ニ就テ最モ喜悅ニ堪ヘザルモノハ路傍演說ノ端ヲ開キシコト是ナリ聞ク所ニ據レバ岡山縣士中川某ノ發起ニテ大ニ同志ヲ募リ既ニ官許モ得シトテ讚州高松ノ立志社員ハ盛ニ路傍演說ヲ始メタリト其人ハ巡查ノ用ウル如キ提燈ヲ携ヘ市街ヲ徘徊シテ往來群集ノ地ヲ選ミ雄辯快舌ヲ揮ツテ有益ノ談ヲ爲ス其初メニ方リテヤ行人モ或ハ喧嘩ト誤認シ或ハ狂癡ノ如ク思ヒシモ後ニハ其事ノ聞クベク其言ノ喜ブベキモノアルヲ以テ自家ノ急用ヲ攔キ歩ヲ駐メテ以テ演

説者ノ前後左右ヲ取卷キテ殆ンド往來ヲ填塞スルニ至リ夫ノ目印ノ提燈ヲ見レバ群蟻ノ糖塊ニ集マルガ如シト

(註) 明治十一年十二月、「三寸ノ舌頭一國ノ治亂ニ關ス」の條

〔二二四一〕開化評林  
卷ノ一

申三月十日ヨリ二十日ノ間、文部省博物館ニ於テ、博覽會ヲ催サル、毎朝九字ヨリ午後四字ニ至ル迄、男女ヲ論セズ、一日大略千人ヲ限リトシ、同館及ヒ諸方書林ヨリ出セル切手ヲ以テ、拜觀スルコトヲ許サル、又同省ヨリノ布告書アリ、云、博覽會ノ旨趣ハ、天造人工ノ別ナク宇内ノ產物ヲ蒐集シテ其名稱ヲ正シ、其用方ヲ辨シ、人ノ知見ヲ廣ムルニ在リ、就中古器舊物ニ至テハ、時勢ノ推遷、制度ノ沿革ヲ追徵スベキ要物ナルニ因リ、嚮者御布告ノ意ニ原キ、周ク之ヲ羅列シテ、世人ノ放觀ニ供セント欲ス、然トモ其各地ヨリ徵集スルノ期ニ至テハ、之ヲ異日ニ待ザルヲ得ズシテ、現今存在ノ舊器

ハ、社寺ニ遺傳スル什物ノ外、其用ニ充ツヘキ物少ナク、加フルニ皇國從來博覽會ノ擧アラザルニヨリ、珍品奇物ノ官庫ニ貯フル所、亦若干許ニ過ギズ、因テ古代ノ器物、天造ノ奇品、漢洋舶載新造創製等ヲ論ゼズ、之ヲ藏スル者ハ博物館ニ出シテ、此會ノ罅ヲ補ヒ、以テ世俗ノ陋見ヲ啓キ、且ツ古今ノ同異ヲ知ラシムルノ資助トナスヲ請フト云、

(註) 「博覽會ノ景況并布告書」の條

〔二二四二〕文部省第四年報  
第一冊

伏テ惟ルニ世ニ博物館ノ設ケ多クシテ其或ハ博物美術醫學教育等ノ名稱ヲ冠スルモ之ヲ要スルニ各學科上親シク實物ニ就テ學ハサレハ隔靴搔痒ノ歎ヲ免レサルカ故ナリ故ニ學術ノ高尚ニ赴クニ隨ヒ人愈此歎ナキ能ハサレハ國愈文明ニ進歩スルニ隨ヒ博物館ノ設多キ所以ニシテ國ノ文不文ハ博物館ノ多少ヲ以テトスルニ足レリ我文部省モ夙ニ此ニ見



ル所アリテ明治八年ヲ以テ東京博物館ヲ再設セリト雖モ如何セン物品ヲ臚列シ庶人ヲシテ來觀セシムヘキ厦屋アラサリシカ故ニ既ニ蒐集セシ物品モ空シク蓄積スルノミナリシカ明治九年六月ヲ以テ文部省新築ノ業ヲ創メ今既ニ造營ノ功成リ開館ノ期近キニ有ルヘシ今ヤ本邦教育ノ進歩セル前日ノ比ニアラサレハ我博物館ニ來觀スル者衆多ニシテ且之ヲ益スルノ多キ敢テ疑ハサル所ナレハ之ニ排列スヘキ物品ハ金額ノ許多ナルヲ顧ミス人力ノ許多ナルヲ厭ハス一時ニ之ヲ蒐集センカ曰ク然ラス夫レ世界ノ濶キ各國ノ多キ博ク教育學術ニ關スルノ物品ヲ蒐集セントセハ巨萬ノ金ヲ傾ルト雖モ一朝ニ能ク得テ之ヲ爲ス可カラサルノミナラス金額ト人力トニ比セハ其益果シテ幾何ソヤ然ハ則チ物品ヲ蒐集スル急ナラサルカ曰ク否本邦古ヨリ教育ノ道行ハレ教科ニ互ルノ物件實ニ鮮カラス宜シク先ツ本邦教育ノ物品ヲ集メ之カ部類ヲ分ツテ排列シ又博物ノ如キモ本邦禽獸草木金石ニ富メリ須ク先ツ本邦ノ動植

礦物ヲ蒐集シ之ニ學術上ノ名稱ヲ付シ之カ類ヲ正シ而シテ後教育博物學ニ係ルノ諸品有餘ヲ以テ外國ノ物品ト交換セハ金額ト人力トヲ費サスシテ有無相補ヒ彼我相益シ博ク各國ノ物品ヲ集ムルモ亦難キニアラサルヘシ本館ノ目途タル斯ノ如ク夫レ有無相交換セント欲スルニ在レハ數年ニシテ之カ大成ヲ見ルコト能ハサルモ數十年ヲ出スシテ我博物館ヲシテ東洋中ノ一大博物館タラシムルモ亦期スヘキナリ

(註) 「東京博物館年報」中の一節

〔二二四三〕文部省第四年報  
第一冊

明治九年蒐集ノ書籍四萬一千餘冊コレニ前年ノ數ヲ合算シテ七萬餘冊ニ達ス而シテ求覽ノ人員二萬四千四百六十八人平均一日七十二人強ニ當レリ夫レ本館百事改創以來僅ニ一年有餘ニシテ粗書籍館ノ體裁ヲ具有シ大ニ人民ノ公益ヲ資成スルヲ得ルモノハ固ヨリ閣下ノ明慮ニ出ル

ト雖モ文運隆興ノ然ラシムル所ニ非スシテ何ソヤ生等亦此館ニ從事スルヲ以テ夙夜黽勉閣下ノ明慮ニ副ハントスルハ嘗ニ職任ノ義務トナスノミナラス聊文運ノ隆興ヲ補助セント欲スル所以ナリ然ルニ本館既ニ已ニ閣下不測ノ明斷ニ由リ一旦廢止セラルト雖モ冀クハ更ニ其保存ノ方法ヲ設爲シ蒐集ノ書籍ヲシテ紛亂離散セサラシメ漸次其隆昌ヲ慮リ多年ノ後本館ノ本邦ニ於ケルハ蓋シ貌利典博物館ノ大英國ニ於ケル議院書庫ノ北米合衆國ニ於ケルカ如キ重要ノ地位ヲ占有セシメンコトヲ

(註) 「東京書籍館年報」中の一節

〔二二四四〕文部省第五年報第一冊

當館ニ設備スル書籍ハ教育家參考ニ益スルヲ以テ専ラ教育ニ關スル雜誌報告及ヒ教科書圖畫其他内外書籍新聞紙等ナリ但求覽ニ便ナル爲書目表ヲ備ヘ置ヲ以就テ見ル可シ

(註) 「大阪府年報」中「博物館書籍館」の條

〔二二四五〕新聞雜誌第七十號

西京小學校ニテ毎月二七ノ夜區内幼童勸善ノ爲メ御布令諸新聞紙等ヲ講諭セリ又山梨縣ニテモ一六或ハ三八ノ夜ヲ以テ毎月六度宛新聞解話ノ會アリトゾ當節府下ニ於テハ談師圓朝席話ノ始メニ新聞中ノ緊要ナル箇條ヲ講說セリ女兒ナドハ新聞紙モ解シ難キコト多ケレバ此等亦善導ノ一端トモナリヌベキコトナリ

(註) 明治五年十一月

〔二二四六〕新聞雜誌第百七十八號

静岡縣下富士郡大宮町ニ於テ先頃ヨリ村民等一社ヲ結ビ開化講ト唱ヘ一口ノ懸金三十七錢五厘宛ヲ出シ合ヒ社友凡三十名ニテ毎月十五日ヲ

以テ會同ノ日ト定メ各種ノ新聞紙及ビ翻譯書類ヲ取寄セ互ニ時勢ヲ論辨シ智覺ヲ開ク方向ヲ說示シ頻リニ開明ノ域ニ進マントナス由社盟モ追々増加シ頃日ニテハ其人員百ヲ以テ數フルニ至レリト云

(註) 明治六年十二月

〔二二四七〕新聞雜誌  
第二百九十號

然リ而シテ又賀スベキモノアリ淺草寺内ニ各種新聞翻譯書類展觀所アリ僅三錢ヲ投シテ諸書ヲ閱シ智識ヲ增益ス往日ノ如キハ茶店ニ憩ヒ醜女ノ笑ニ光陰ヲ費シ今日ハ轉シテ哲人ノ門ニ遊ブ豈雀躍ニ堪ヘザランヤ願ハ此一事有志ノ諸君邊陲僻邑ノ地ヘモ設立ノ舉アラバ果シテ庶民開明ノ澤ニ浴スルニ至ランカ

(註) 明治七年八月十四日「新聞縱覽所ノ有益」中の一節

## 解 說

最近世に於ける教育施設は學校教育が驚く程大きな分野を占めるに至つたことである。然かもこれ等の學校教育を國家の教育制度として運用することゝなつたのである。學校教育のかゝる國家統轄をなす爲に、明治四年七月中央機關としての文部省が設けられた。文部省は従前よりあつた學校をその統轄下に置いた許りではなく、國民教育の爲め充分な學校施設をなすの企畫を試みるに至つた。その結果として成立したのが、明治五年八月の學制である。この學制に於いては、速かに學校の施設を完了し、近代教育を全國に施行するために學區制を敷いた。全國を大・中・小の學區に分ち、そこに各々大學・中學・小學を設けるの計畫をなしたのである。學校の設置監督に關しては、學區取締、督學局が設けられ、又教員、試業等に就いても規定を設けて、これを全國の學校に適用した(二二八五—二二八八)。この學制は極めて大きな範圍に亘つた學校計畫であつたので、これを實施するに就いての着手順序を定めて施設を進捗せしめた。主たる力を注いだのは初等教育であつて、小學校の設置を急いだ。これと關聯して小學校教員の養成に當り、師範學校の設置並びに各府縣に於ける教員の講習所などが發展した(二二八九)。學制は明治十二年九月教

育令が公布せられた際に廢止になつたが、この教育令は翌十三年十二月改正せられて、全國學校の統轄をなし、明治十九年各學校令が公布されて、それらの學校に關する規程をなすに至つて教育令は廢止せられた〔二二九〇・二三〇〇・二三〇二・二三一〇・二三三一・二三三六〕。

小學校は明治五年學制が發布せられると共に、全國的な教育制度として實施されるに至つたのであるが、維新直後から各地にこの小學校にあたる學校が既に成立してゐた。これを廣く見れば徳川時代の寺子屋をも考へなければならぬが、近代的な初等教育機關としては、京都の小學校、金澤の小學校その他各地の學校が明治二年頃より設けられた。又徳川時代の終り頃から各地に設けられるに至つた庶民教育機關としての郷校が、明治時代に入ると各藩の教育施設の中にあつて庶民の學校として發展し、その校數が激増してゐる〔二二九一―二二九三〕。

政府の小學校に對する方策は、既に明治二年に各府縣に小學校の設置を奨め、一般人に對する初等教育機關としての機能を發揮せしめてゐる。又大學の豫備教育機關としての小學の設置企畫なども行はれた。文部省が設けられてからは東京市内に小學校の設立を命じ、全國に近く實施すべき初等教育企畫の試みとなした〔二二九四―二二九七〕。明治五年の學制は、初等教育機關に就いての規程を最も詳細になしてゐるが、この學制によつて我國の小學校はその基本となる構造が定められるに至つた〔二二九八〕。各府縣は夫々この學制に基いて管内の小學校施設の企畫をなし、それ

を次第に實現したのであつて、その初めは讀書算を簡易に授けてゐたもので、小學校と言つても寺子屋を改名したに過ぎないものであつた。唯この學制は從來私立の初等教育機關であつた寺子屋を小學校として整へ、將來發展すべき土臺を築いたのである〔二二九九〕。その後制度としては、明治十三年に教育令が改正せられ、明治十八年の教育令改正で簡易な小學教場が認められ、明治十九年には獨立の規程として小學校令の公布を見た。この小學校令で尋常小學校高等小學校の形が成立し、各四ヶ年とし、小學簡易科も土地の事情によつてはこれを認めることとした〔二三〇〇―二三〇二〕。小學校入學以前の幼兒を保育する機關としての幼稚園は明治八年京都に小規模のものが設けられたが、明治九年東京女子師範學校に附屬して官立の幼稚園が創設せられ、これが幼稚園發達の萌芽となつた。これから後次第に各府縣に設けられるに至つた幼稚園は、多くこの東京の幼稚園を模範としてゐる〔二三〇三・二三〇四〕。

男子のための中等教育施設として最も早く設けられるに至つたのは中學である。明治三年大學規則が整へられた際に、豫備教育機關として中學が設けられる計畫であつた。學制に於いては中學區に一校宛設けられる學校として中學が企畫せられ、初めて中學が制度化した〔二三〇五―二三〇六〕。併し當時は中學の設置に對しては餘り力を注がず、其頃各地に設けられてゐた私塾を私立中學として取扱つてゐたもので、學校數は多いが、その實は擧げられてゐなかつた〔二三〇七〕。明治

十四年に中學校教則大綱が設けられたことは、中學校の組織を立てるため制度上一つの段階を築いたものである。明治十九年に中學校令が公布せられ、中學校を尋常高等の二等に分ち、公費を以て設立する尋常中學校を各府縣一校としてから、初めて中學校制度の土臺が築かれるに至つたのである。この學校令中にある高等中學校は後に高等學校となつた〔二二〇八—二二一〇〕。女子の中等教育機關である高等女學校が、制度として成立したのは明治二十八年であつて、それ迄は各地に男子の中學校に倣つて設けられてゐるに過ぎなかつたのである。東京に明治五年から設けられた東京女學校はその最も早いものであるが、地方では簡易な形の女學校が次第に設けられ、下等小學を修了した女兒に實務教育をなす女紅場の如きものもあつた〔二二一一—二二一四〕。明治十五年東京女子師範學校内に附屬高等女學校が官立として設けられたが、これは後に發展する公立高等女學校の端緒を開いたものである〔二二一五〕。

師範教育のために學校が設けられ、教員養成をなすに至つたことは、最近世の學校教育が持つ重要な特質である。文部省は明治五年東京に最初の師範學校を設け、歐米の師範教育にその範をとつて、小學校教員の養成に着手した。この師範學校に於いて實地の經驗に基いて我國小學校の教則を定める計畫であつた。この方針に従つて全國から生徒が募集せられ、中央に於ける教員養成が始められた〔二二一六〕。この東京師範學校の卒業生が各地の官立師範學校や、府縣の教授法講習

所へ派出せられ、新しい教則に基いた近代學校教育法を傳へ、全國に互る師範教育が急速に發展したのである〔二二一七—二二一九〕。明治十四年全國の師範學校を統轄する爲に、師範學校教則大綱が定められ、明治十九年の師範學校令で、制度として整つた。即ち高等師範學校、尋常師範學校が設置され、中等教員養成の機關も制度として確立された〔二二三〇—二二三二〕。尙ほ體操教育のために體操傳習所が東京に設けられて、新しい教育内容である體操がこゝで傳習された〔二二三三〕。

専門學校は僅かに中央にあるものが漸くその形を整へる有様で、地方の學校は中等程度の實業學校と稱し得る程度のものであつた〔二二三三—二二三四〕。私立の専門教育機關にあたるものは、東京に於ける洋學等の私塾が主たるもので、地方の専門教育機關は、中等程度の農學校商業學校である〔二二三五—二二三九〕。これ等の農商學校を制度化するために、農學校通則・商業學校通則が設けられたが、これ等が発達するのは明治二十七年頃から後である〔二二三〇—二二三一〕。

大學は明治維新初頭から新政府の教育方策の主たる位置を占め、中央に於ける大學を整備して教育學術の中心機關たらしむる方針がとられてゐた。そのため明治三年二月に大學規則が設けられ、五分科大學の制が立てられたが、實際は南校及び東校が設立されて他日大學制度が整備せられるに至る土臺となつてゐたに過ぎなかつた〔二二三二—二二三三〕。明治五年の學制は、大學に關する規程は設けたが、大學は直ちに設けられるに至らず、漸く専門學校の形ものが成立したに過

ぎなかつた。明治十年初めて東京大學の組織が成立し、開成學校醫學校が改められて、法理文醫の四學部が置かれた〔二三三四・二三三五〕。明治十九年帝國大學令が公布せられ、大學院及び分科大學の制度が置かれるに至り、五分科大學の設置を見ることが出来た〔二三三六〕。

社會教育の施設としては、明治三年より宣教使が置かれ、教導職の制度となつて、一時宗教家が政府の教化方針に従つた説教を行ひ、一般人に對する教化の任務を擔當してゐた〔二三三七・二三三八〕。新しい文明開化の産物として演説館が設けられ、新知識を民衆に與へるに役立つた。民権運動が起ると共にこの演説が各地に於いて政談の目的から開かれ、路傍演説などになつてゐる〔二三九・二三四〇〕。又博覽會が開かれて多くの人の注目を引いたが、これを恒久施設とした博物館は社會教化の一施設となつた。その代表的なものは東京博物館であるが、小規模なものは地方にも設けられた〔二三四一・二三四二〕。書籍館も教育者や一般人に讀書の便宜を與へる施設として設けられて來てゐる。博物館と並んで設けられた東京書籍館や大阪の書籍館などは、この施設を代表してゐる〔二三四三・二三四四〕。新聞が次第に普及し購讀者が多くなつたことは、最近世に於ける新しい世相を示すものであるが、この新聞によつて社會教化をなす施設も現はれてゐる。講釋の席で新聞紙を用ひ、講によつて讀書クラブを設け、新聞や翻譯書などの展觀所を設けて簡易圖書館の如きものとした文明開化の施設などもあつた〔二三四五・二三四七〕。

#### 第四章 教育の内容

〔二三四八〕 啓蒙手習之文

從來手習師匠の教は實學の切要なるに眼を着せず唯冠婚喪祭、探花觀月の文、和歌唐詩等の外ならずして方今文開の世に在ては或は迂遠の譏を免れず由て私に社中と謀り、いろは四十七文字より國盡を始とし傍ら西洋諸書を意譯して通俗の文章を作り上梓して習字の手本に供せり願くは五六歳の童兒其字を習ふの傍に文の義を解し諸學入門の道を易くする事あらば此冊子も亦手習師匠の一助にして世教萬分の一に益あらん乎、

(註) 明治四年三月、序文の一節

〔二三四九〕 小學教則

第四章 教育の内容

○第八級 六箇月 一日五字一週三十字ノ課程  
日曜日ヲ除ク以下之ニ倣ヘ

綴字 カキマゼ 一週六字即一日一字

生徒残ラス順列ニ並ハセ智恵ノ絲口うひまなび繪入智恵ノ環一ノ卷等ヲ以テ教師盤上ニ書シテ之ヲ授ク前日授ケシ分ハ一人ノ生徒ヲシテ他生ノ見エサルヤウ盤上ニ記サシメ他生ハ各石板ニ記シ記シ畢テ盤上ト照シ盤上誤謬アラハ他生ノ内ヲシテ正サシム

習字 マナブ 一週六字即一日一字

手習草紙習字本習字初步等ヲ以テ平假名片假名ヲ教フ但數字西洋數字ヲモ加ヘ教フヘシ尤字形運筆ノミヲ主トシテ訓讀ヲ授クルヲ要セス教師ハ順廻シテ之ヲ親示ス

單語讀方 コトバノヨミカタ 一週六字即一日一字

童蒙必讀單語篇等ヲ授ケ兼テ其語ヲ盤上ニ記シ訓讀ヲ高唱シ生徒一同此ニ準誦セシメ而シテ後其意義ヲ授ク但日日前日ノ分ヲ誦誦シ來

ラシム

洋法算術 ヨウホウサンジュツ 一週六字即一日一字

筆算訓蒙洋算早學等ヲ以テ西洋數字數位ヨリ加減算九九ノ聲ニ至ル迄ヲ一盤上ニ記シテ之ヲ授ケ生徒ヲシテ紙上ニ寫シ取ラシム但加減ノ算法ニ於テハ先ツ其法ヲ授ケ而シテ只其題ノミヲ盤上ニ出シ筆算ト誦算トヲ隔日練習セシム誦算トハ胸算用ニテ紙筆ヲ用ヒス生徒一人ツ、ヲシテ盤上ノ題ニ答ヘシムルナリ前日ノ分ハ總テ盤上ニ記シテ生徒ヲシテ一同誦セシム

脩身口授 シユシンクウジュツ 一週二字即チ二日置キニ一字

民家童蒙解童蒙教草等ヲ以テ教師口ツカラ縷縷之ヲ説諭ス

單語誦 コトバノヨミ 一週四字

一人ツ、直立シ前日ヨリ學フ處ヲ誦誦セシメ或ハ此ヲ盤上ニ記サシム

○第七級 六箇月

綴字 一週六字

前ノ如クニシテ五十音四段ノ活用其外字音假名ツカヒ等ヲ授ク

習字 一週六字

前級ノ如ク漢字楷書ヲ授ク

單語讀方 一週四字

地方往來農業往來世界商賣往來等ヲ前級ノ如ク授ク

算術 一週六字

乗除ヲ授クルコト前級ノ法ノ如シ尤隔日筆算ト語算トヲ傳フ

會話讀方 一週四字

會話篇ヲ以テ授クルコト單語篇ノ法ニ同シ

單語語誦 一週二字

前級ノ如シ

修身口授 一週二字

前級ノ如シ

○第六級 六箇月

習字 一週六字

行書ヲ授クルコト前級ノ如シ

單語書取 一週四字

教師單語ヲ口ニ誦シテ生徒ヲシテ聞書セシメ書シ畢テ教師之ヲ盤上

ニ記シ生徒ヲシテ照シ正サシム

算術 一週六字

乗除ノ算ヲ授ク

會話讀方 一週六字

前級ノ如シ

讀本讀方 一週六字



西洋衣食住學問のすゝめ啓蒙智恵ノ環等ヲ用テ一句讀ツ、之ヲ授ケ生徒一同之ニ準誦ス

脩身口授 一週二字

勸善訓蒙脩身論等ヲ用ヒ教師之ヲ講述スルコト前級ノ如シ

第五級 六箇月

習字 一週六字

行書ヲ授クルコト前級ノ如シ

單語書取 一週二字

前級ノ如シ

會話誦 一週六字

嚮ニ學フ所ヲ一人ツ、處ヲ變ヘテ誦シ又ハ未タ學ハサル所ヲ獨見

シ來テ誦セシム

算術 一週六字

四則應用ヲ學ハシム尤筆算諸算隔日タリ

讀本讀方 一週四字

前級ノ外西洋夜話窮理問答物理訓蒙天變地異等ヲ授ク

地學讀方 一週三字

日本國盡ヲ授クルコト讀本讀方ノ如シ

脩身口授 一週一字

性法略等ノ大意ヲ講授ス

養生口授 一週二字

養生法健全學等ヲ用テ教師縷縷口述ス

○第四級 六箇月

習字 一週六字

楷書ト片假名ノ交リタル文ヲ習ハシム但字形稍小ナルヘシ

會話書取 一週四字

其法單語書取ノ如シ

算術 一週六字

諸等加減乗除法ヲ授ク

讀本輪講 一週六字

既ニ學ヒシ所ヲ誦シ來リ一人ツ、直立シ所ヲ變ヘテ其意義ヲ講述ス

地學讀方 一週六字

世界國盡ヲ授ク

文法當分關ク

、、ノ書ヲ用テ詞ノ種類名詞ノ諸變化ヲ授ク尤誦ヲ主トス

養生口授 一週二字

前級ノ如シ

○第三級 六箇月

習字 一週六字

行草平假名交リノ文ヲ習ハシム

算術 一週六字

分數算ヲ授ク

讀本輪講 一週六字

前級ノ如シ

地學輪講 一週六字

日本國盡ヲ講述セシムルコト讀本輪講ノ如シ兼テ日本地圖ノ用法ヲ示ス

養生口授 一週二字

前級ノ如シ

文法當分關ク

後詞樣詞代詞等ノ諸變化ヲ授クルコト各科讀方ノ如シ

理學輪講 一週二字

窮理圖解等ノ書ヲ授ケ講述セシム

書牘 一週二字

啓蒙手習本捷理十二月帖ナトヲ用ヒ簡略ナル日用文ヲ盤上ニ記シテ講解シ生徒ヲシテ寫シ取ラシム

○第二級 六箇月

習字 一週四字

前級ノ如シ

算術 一週六字

分數算ヲ授ク

讀本輪講 一週六字

道理圖解西洋新書等ノ書ヲ授ケ講述セシム

地學輪講 一週六字

既ニ學フ所ノ世界國盡ヲ順次ニ講述セシメ兼テ世界地圖ノ用法ヲ示

ス

文法當分關ク

働詞ノ活用變化ヲ授ク

理學輪講 一週四字

前級ノ如シ

書牘 一週四字

前級ノ如シ

○第一級 六箇月

習字 一週二字

前級ノ如シ

算術 一週六字

分數并比例算ヲ授ク

讀本輪講 一週四字

前級ノ如シ

理學輪講 一週六字

前級ノ如シ

地學輪講 一週四字

前書或ハ地學事始等ヲ以テ世界地圖ノ用法ヲ講述セシム

文法當分關ク

接詞副詞歎詞等ノ活用ヲ授ク

書牘 一週六字

日用文諸證文等ヲ授ク

各科溫習 一週二字

從前學フ所ノ者ヲ舉テ溫習セシム

右畢テ大試業ノ上上等小學ニ入ラシム

落第ノ生徒ハ猶六箇月第一級ニ置ク

(註) 明治五年九月八日文部省布達番外「小學教則」中、下等小學のみを掲ぐ

〔二二五〇〕文部省雜誌  
明治七年第一號

聲音ヲ標シ事物ヲ記シ以テ之ヲ他日ニ證スルモノハ文字ナリ、言語ヲ綴リ意想ヲ寫シ以テ之ヲ四方ニ達スル者ハ文章ナリ、此二ツノ者ヲ學バザレバ彼我意ヲ致スコト難ク、遠邇言ヲ通ズルニ由ナシ、甚キモノハ自ラ其姓名ヲ記スル能ハザルニ至ル、此ノ如キモノ全國少シトセズ、是習字作文書取書讀  
文法綴字等ノ教科アル所以ナリ、音聲アリテ其情志ヲ發シ、言語アリテ其曲節ヲ盡スト雖ドモ、風土ニヨリテハ其調ヲ異ニシ、習俗ニヨリテ其辭ヲ別ニス、苟モ之ヲ學習ニ得ルニ非ザレバ、一國ノ中猶且ツ東西ノ言語通ゼザルモノアリ、現今陸羽ノ人ノ薩隅ノ民ニ於ケル、其言語全ク相通ゼザルガ如シ、其不便勝テ言可カラズ、是會話單語  
問答ノ教科アル所以ナリ、各國其政體ヲ異ニスルモノハ、其國風異ナルヲ以テナリ、故ニ其國ニ生レテ其國風ヲ

知ラザレバ、人情ニ戻リ事理ニ違フモノアルニ至ル、是政體學ヲ置ク所以ナリ、人間ノ交際ハ皆ナ當然ノ倫理アリテ、苟モ其道ヲ知ラザレバ或ハ情ニ悖リ義ニ背クニ至ル、是修身學ヲ置ク所以ナリ、人生一日モ衣食住ノ資ナカルベカラザレバ、其資ヲ出スノ道ヲ知ラズンバアル可カラズ、而シテ日用ノ諸品悉ク自ラ作ルコト能ハザレバ、則之ヲ貿易ノ便ニ付セザル可ラズ、資ヲ出スノ道ヲ知テ貿易ノ便ニ付セント欲セバ、其得失利害ヲ窮ル皆計算ニアリ、是數學<sup>算術幾何代數</sup>ノ教アル所以ナリ、物アレバ必理アリ、其理ヲ知ラザレバ其物ヲ用キル能ハズ、其理ヲ究メザレバ其物ヲ成ス能ハズ、今始テ電機汽車氣球寫眞ノ類ヲ見聞セバ、驚キ且ツ怪マザルモノ少カラシ、是他ナシ其理ヲ講ゼザレバナリ、是物理學ノ設ケアル所以ナリ、身體健康ナラザレバ百事成ス可ラズ、是養生ノ法知ラザル可カラザル所以ナリ、規矩方圓ヲ畫ク能ハザレバ、家屋器械何ヲ以テ其模範ヲ造ラン、是畫ノ習ハザル可ラザル所以ナリ、吾國ノ高山大川州郡府縣等ノ配列ヨリ、吾人蹈ム所

ノ地球ノ形體及萬國ノ位置ヲ知ラント欲スル、地理學ニ由ラズンバアルベカラザルナリ、吾國ノ興廢治亂以テ今日ニ至ル迄ノ形勢ヨリ、地球上萬國ノ盛衰及歷代ノ沿革ヲ知ラント欲スル、歴史ニ由ラズンバアルベカラザルナリ、書ヲ讀ムモ徒ラニ音讀ニ止マリ、其意ヲ解スルモノ百中ニ或ハ一人ナシ、是皆讀書ノ法ナキヲ以テナリ、能ク其意ヲ解セント欲スル、讀本ノ教科ニ由ラズンバアルベカラザルナリ、是等ノ事ハ中學以上ノ業ニシテ、固ヨリ小學ノ能スベキニ非ズト雖ドモ、其大意ヲ知テ事ニ從ハザレバ、特ニ功ヲ畢リ身ヲ立ルコト能ハザルノミナラズ、人間ノ交際上ニ於テモ欠ク所少シトセズ、是人ニシテ人ノ務ヲ爲スコト能ハザルモノナリ、

(註) 西潟訥學區巡視功程開申中「説諭第一則」

〔二二五〕 文部省第三年報  
第一冊

各府縣ニ於テ用フル所ノ小學教科書ハ專官板ニ係ルモノニシテ私板ノ

書ヲ雜ヘ用フルモノハ僅ニ數地方ニ過キス其書冊ヲ概算スレハ其數百三十九種ニシテ文部省ノ官板ニ係ルモノ四十種他ノ官板ニ係ルモノ二種私板ニ係ルモノ九十七種アリ其數ヲ以テ視ルトキハ私板ニ係ルモノ少カラスト雖實際各府縣ニ於ル所用ノ多少ニ至テハ文部省ノ官板ニ係ルモノ十ノ八九ニ居ル今之ヲ細別スレハ綴字單語連語ハ文部省ノ官板各一種習字書ハ文部省ノ官板二種私板三種畫學書及讀本ハ文部省ノ官板各二種修身書ハ文部省ノ官板一種私板六種歴史ハ文部省ノ官板五種他ノ官板一種私板十五種數學書及數學圖ハ文部省ノ官板各三種記簿法ハ文部省ノ官板一種文法書及生理書ハ私板各一種地理書ハ文部省ノ官板五種他ノ官板一種私板二十二種化學書ハ文部省ノ官板二種私板七種博物書ハ文部省ノ官板二種私板七種經濟書ハ文部省ノ官板二種私板二種政治書ハ私板四種其他雜書ノ類文部省ノ官板五種私板二十九種アリ

(註)「教科書」の條

〔二二五二〕文部省第三年報 第一冊

下等小學教科表

六級以下書取五級以上作文

課目	復讀	讀	書取作文	問答	算術	習字	體操
級一	復習	史略中西洋ノ部ヲ授ク	前級ノ如シ	史略中西洋ノ部	容易キ分數珠算ハ乘法	前級ノ如シ	前級ノ如シ
級二	復習	史略中日本支那ノ部ヲ授ク	綴ラシム	暗射地圖	四則難題珠算ハ加減法	草書手紙ノ文	前級ノ如シ
級三	復習	日本地誌略二、史略中日本ノ部并地圖ヲ示ス	前級ノ如シ	日本地誌略及史略中日本ノ部	除法ヲ授ク前級ノ如シ	前級ノ如シ	前級ノ如シ
級四	復習	小學讀本五、日本地誌略一ヲ授ケ地圖ヲ示ス	前級ノ如シ	小學讀本五、日本地誌略及地圖等	乘法ヲ授ク前級ノ如シ	行書ヲ授ク	前級ノ如シ
級五	復習	小學讀本四ヲ授ク	單語中ノ一二字或一句ヲ題トシ一或一二句ヲ綴ラシム	小學讀本四及地球儀等	減法ヲ授ク前級ノ如シ	前級ノ如シ	前級ノ如シ
級六	復習	小學讀本三、地理ヲ示ス	小學讀本中ノ句ヲ書取シム	形體線度圖及地理初歩、地球儀等	加法ヲ授ケ初ハ小學算術書ヲ用テ計算ヲ主トス	前級ノ如シ	前級ノ如シ
級七	復習	小學讀本一二ヲ授ク	單語ヲ書取シム	人體ノ部分通常物及七色ノ圖	自百至萬ノ數ヲ教ヘ乘算九々諸語兼テ羅馬數字ヲ授ク	前級ノ如シ	前級ノ如シ
級八	復習	單語圖、連語圖、小學讀本一ヲ授ク	五十音并單語ノ文字ヲ假名ニテ綴ラシム	單語圖ヲ用テ諸物ノ性質及用方等ヲ問答ス	一至百書方、位取并算盤ニテ用テ方ヲ教ヘ加算九々ヲ諸語兼テ	石盤ニテ假字ヲ教ヘ次ニ習字本ヲ與フ	依テ授ク
時間	六時	五時	二時三十分	二時三十分	六時	五時	三時

### 上等小學教科表

四級以下習字三級以上算術

級一	級二	級三	級四	級五	級六	級七	級八	時間週	課目
輪講 物理階梯三及博物新 編補遺健全學ヲ授ク	輪講 萬國新史及物理階梯 一二ヲ授ク	輪講 日本略史三四及泰西 史鑑上古ノ部ヲ授ク	輪講 修身論二及日本略史 一二ヲ授ク	輪講 輿地誌略歐羅巴ノ部 及修身論一ヲ授ク	輪講 輿地誌略亞西亞ノ部 ヲ授ク	輪講 兵要日本地理小誌二 三ヲ授ク	輪講 兵要日本地理小誌一 ヲ授ク	六時 五時	讀物
語記	語記	語記	語記	語記	語記	語記	語記	二時半	語記
開平開立ヲ授ク	級數ヲ授ク	按分遞折比例ヲ 授ク	利足算ヲ授ク	合率比例ヲ授ク	連鎖比例ヲ授ク	正比例轉比例ヲ 授ク	分數ヲ授ク	六時	算術
地圖其他種々ノ 物ヲ畫カシム	直線體及弧線體 ノ類ヲ畫カシム	直線弧線及半面 ノ類ヲ畫カシム	前級ノ如シ	細字草書ヲ授ク	細字行書ヲ授ク	前級ノ如シ	細字楷書ヲ授ク	五時	習字算術
前級ノ如シ	前級ノ如シ	前級ノ如シ	前級ノ如シ	前級ノ如シ	前級ノ如シ	問題ヲ出シ答ヲ 文ニ綴シム	手紙ノ文ヲ作ラ シム	二時半	作文
諸科復習								二時半	諸科復習
體操	體操	體操	體操	體操	體操	體操	體操	三時	體操

(註) 「度會縣年報」中「學規」の條

〔二二五三〕法令全書  
明治十四年

第一條 小學科ヲ分テ初等中等高等ノ三等トス

第二條 小學初等科ハ修身、讀書、習字、算術ノ初步及唱歌、體操トス

但唱歌ハ教授法等ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ

第三條 小學中等科ハ小學初等科ノ修身、讀書、習字、算術ノ初步及唱歌、體操ノ續ニ地理、歴史、圖書、博物、物理ノ初步ヲ加ヘ殊ニ女子ノ爲ニハ裁縫等ヲ設クルモノトス

第四條 小學高等科ハ小學中等科ノ修身、讀書、習字、算術、地理、圖書、博物ノ初步及唱歌、體操、裁縫等ノ續ニ化學、生理、幾何、經濟ノ初步ヲ加ヘ殊ニ女子ノ爲ニハ經濟等ニ換ヘ家事經濟ノ大意ヲ加フルモノトス

第五條 小學科ノ區分ハ前三條ノ如ク定ムト雖モ土地ノ情況、男女ノ區別等ニ因テハ某學科ヲ増減スルコトヲ得

但修身、讀書、習字及算術ハ之ヲ缺クコトヲ得ス

(註) 明治十四年五月四日 文部省達第十二號、小學校教則綱領「第一章小學校ノ區分」の條

〔二二五四〕法令全書  
明治十四年

第十條 修身 初等科ニ於テハ主トシテ簡易ノ格言、事實等ニ就キ中等科及高等科ニ於テハ主トシテ稍高尚ノ格言、事實等ニ就テ兒童ノ徳性ヲ涵養スヘシ又兼テ作法ヲ授ケンコトヲ要ス

第十一條 讀書 讀書ヲ分テ讀方及作文トス

初等科ノ讀方ハ伊呂波、五十音、濁音、次清音、假名ノ單語、短句等ヨリ始メテ假名交リ文ノ讀本ニ入り兼テ讀本中緊要ノ字句ヲ書取ラシメ詳ニ之ヲ理會セシムルコトヲ務ムヘシ中等科ニ於テハ近易ノ漢文ノ讀本若クハ稍高尚ノ假名交リ文ノ讀本ヲ授ケ高等科ニ至テハ漢文ノ讀本若クハ高尚ノ假名交リ文ノ讀本ヲ授クヘシ凡讀本ハ文體雅馴ニシテ學術上ノ益アル記事或ハ生徒ノ心意ヲ愉ハシムヘキ文詞ヲ包有スル

モノヲ撰用スヘク之ヲ授クルニ當テハ讀法、字義、句意、章意、句ノ變化等ヲ理會セシムルコトヲ旨トスヘシ

初等科ノ作文ハ近易ノ庶物ニ就テ其性質等ヲ解セシメ之ヲ題トシ假名ニテ單語、短句等ヲ綴ラシムルヲ初トシ稍進テハ近易ノ漢字ヲ交ヘ次ニ簡短ノ假名交リ文ヲ作ラシメ兼テ口上書類ヨリ日用書類ニ及フヘシ中等科及高等科ニ於テハ日用書類ヲ作ラシムルノ外既ニ學習セシ所ノ事實ニ就テ志傳等ヲ作ラシムヘシ

第十二條 習字 初等科ノ習字ハ平假名、片假名ヨリ始メ行書、草書ヲ習ハシメ其手本ハ數字、十干、十二支、苗字、著名ノ地名、日用庶物ノ名稱、口上書類、日用書類等民間日用ノ文字ヲ以テ之ニ充ツヘシ中等科及高等科ニ至テハ行書、草書ノ外楷書ヲ習ハシムヘシ

第十三條 算術 筆算ヲ用フルトキハ初等科ニ於テハ實物ノ計方、加減、乗除ノ法、其應用、度量衡、貨幣ノ名義及其計算ノ法ヲ學ハシムヘク中等



科ニ於テハ之ニ繼クニ數ノ性質及分數、小數、比例ヲ以テシ高等科ニ至テハ比例、百分算、開平、開立及求積等ヲ學ハシムヘシ珠算ヲ用フルトキハ初等科ニ於テハ實物ノ計方、算珠ノ運用、加減乘除ノ法、其應用、度量衡、貨幣ノ名義及其計算ノ法ヲ學ハシムヘク中等科ニ於テハ異乘同除、同乘異除、差分ヲ授ケ高等科ニ至テハ筆算ノ加減乘除ノ法及分數、小數、比例ヲ學ハシムヘシ凡算術ヲ授クルニハ日用適切ノ問題ヲ撰ヒ務テ兒童ヲシテ算法ノ基ク所ノ理及題意等ヲ考究セシムヘシ

但筆算、珠算ヲ併用スルモ妨ケナシ

第十四條 地理 地理ハ中等科ニ至テ之ヲ課シ先學校近傍ノ地形即生徒ノ親ク目撃シ得ル所ノ山谷河海等ヨリ說キ起シ漸ク地球ノ有様ヲ想像セシメ次ニ日本及世界地理ノ總論、五畿八道ノ地理、外國地理ノ大要ヲ授ケ高等科ニ至テハ地文ノ大要即地球、地皮、大氣、水、陸、生物、物産等ノ事ヲ授クヘシ凡地理ヲ授クルニハ地球儀及地圖等ヲ備ヘンコトヲ

要ス殊ニ地文ヲ授クルニハ務テ實地ニ就キ兒童ノ觀察力ヲ養成スベシ

第十五條 歴史 歴史ハ中等科ニ至テ之ヲ課シ日本歴史中ニ就テ建國ノ體制、神武天皇ノ即位、仁德天皇ノ勤儉、延喜天曆ノ政績、源平ノ盛衰、南北朝ノ兩立、徳川氏ノ治績、王政復古等緊要ノ事實其他古今人物ノ賢否、風俗ノ變更等ノ大要ヲ授クヘシ凡歴史ヲ授クルニハ務テ生徒ヲシテ沿革ノ原因結果ヲ了解セシメ殊ニ尊王愛國ノ志氣ヲ養成センコトヲ要ス

第十六條 圖畫 圖畫ハ中等科ニ至テ之ヲ課シ直線、曲線及其單形ヨリ始メ漸次紋畫、器具、花葉、家屋等ニ及フヘシ高等科ニ至テハ草木、禽獸、蟲魚ヨリ漸次山水等ニ及ヒ兼テ幾何畫法ヲ授クヘシ凡圖畫ヲ授クルニハ眼及手ノ練習ヲ主トシテ初ハ輪廓ヲ畫カシメ漸ク進テ陰影ヲ畫カシムヘシ

第十七條 博物 博物ハ中等科ニ至テ之ヲ課シ最初ハ務テ實物ニ依テ通常ノ動物ノ名稱、部分、常習、效用、通常ノ植物ノ名稱、部分、性質、效用及通常ノ金石ノ名稱、性質、效用等ヲ授ケ高等科ニ至テハ更ニ植物、動物ノ略說ヲ授クヘシ凡博物ヲ授クルニハ務テ通常ノ動物、植物、金石ノ標本等ヲ蒐集センコトヲ要ス

第十八條 物理 物理ハ中等科ニ至テ之ヲ課シ物性、重力等ヨリ始メ漸次水、氣、熱、音、光、電氣、磁氣ノ初步ヲ授クヘシ凡物理ヲ授クルニハ務テ單一ノ器械及近易ノ方便ニ依リ實地試驗ヲ施シ其理ヲ了解セシメンコトヲ要ス

第十九條 化學 化學ハ高等科ニ至テ之ヲ課シ火、空氣、水、土等ニ就テ化學ノ端緒ヲ開キ漸次通常ノ非金屬諸元素及金屬諸元素ニ關スル化學說ノ大要ヲ授クヘシ其實地試驗ニ基クヘキコトハ猶物理ニ於ケルカコトシ

第二十條 生理 生理ハ高等科ニ至テ之ヲ課シ骨骼、筋肉、皮膚、消化、血液ノ循環、呼吸、感覺ノ說等兒童ノ理會シ易キモノヲ撰テ之ヲ授ケ務テ實際ノ觀察或ハ模形等ニ依テ其理ヲ了解セシムヘシ又兼テ緊切ノ養生法ヲ授ケンコトヲ要ス

第二十一條 幾何 幾何ハ高等科ニ至テ之ヲ課シ線、角、面及體ノ性質、關係等ヨリ始メ漸次角及面ニ關スル諸題ヲ授クヘシ

第二十二條 經濟 經濟ハ高等科ニ至テ之ヲ課シ近易ノ事實ニ據リ生財、配財及交易等ニ關スル經濟ノ要旨ヲ授クヘシ

第二十三條 裁縫及家事經濟 裁縫ハ中等科ヨリ高等科ニ通シテ之ヲ課シ運針法ヨリ始メ漸次通常ノ衣服ノ裁方、縫方ヲ授クヘク家事經濟ハ高等科ニ至テ之ヲ課シ衣服、洗濯、住居、什器、食物、割烹、理髮、出納等一家ノ經濟ニ關スル事項ヲ授クヘシ凡裁縫、家事經濟ヲ授クルニハ民間日用ニ應センコトヲ要ス

第二十四條 唱歌 初等科ニ於テハ容易キ歌曲ヲ用ヒテ五音以下ノ單音唱歌ヲ授ケ中等科及高等科ニ至テハ六音以上ノ單音唱歌ヨリ漸次複音及三重音唱歌ニ及フヘシ凡唱歌ヲ授クルニハ兒童ノ胸膈ヲ開暢シテ其健康ヲ補益シ心情ヲ感動シテ其美德ヲ涵養センコトヲ要ス

第二十五條 體操 初等科ノ初メハ適宜ノ遊戯ヲ以テ之ニ充テ漸次徒手運動ニ及フヘシ中等科及高等科ニ至テハ兼テ器械運動ヲナサシムヘシ

第二十六條 土地ノ情況ニ因リ農業ノ初步ヲ加フルトキハ農具ノ名稱用法、肥料ノ種類效用、禾穀蔬菜果實ノ性質栽培法、養蠶培桑ノ法及家畜魚鳥ノ飼養法等凡農家ニ緊要ノ事項ヲ授クヘシ工業ノ初步ヲ加フルトキハ器械ノ功用、汽水風力利用ノ一斑、工家ノ經濟及其地方ニ適切ノ製造物ノ品性等凡工家ニ緊要ノ事項ヲ授クヘシ商業ノ初步ヲ加フルトキハ簿記、保險、銀行、郵便、電信、陸運、水運、貨幣、手形等凡商家ニ緊要ノ事

項ヲ授クヘシ

(註) 明治十四年五月四日文部省達第十二號小學校教則綱領第三章小學各等科程度

〔二二五五〕 大阪中學校教則

第一款 修身 人ヲ導キテ善良ナラシムルハ多識ナラシムルニ比スレハ更ニ緊要ナリトス是レ各級ニ通シテ修身科ヲ課スル所以ナリ乃初等中學校ニ於テハ先哲ノ嘉言善行ニ依リ以テ孝悌忠信禮義廉耻慈仁ノ事ヲ授ケ高等中學校ニ於テハ更ニ修身ノ理ヲ説キ以テ心ヲ正クシ己ヲ修メ事ヲ處シ物ニ接スルノ大道ヲ知ラシムヘシ凡修身科ヲ授クルニハ唯其説ク所ヲ記誦セシムルノミヲ以テ足レリトセス徳性ヲ養ヒ躬行ヲ務メ操履ヲ固クセシムルコトヲ旨トシ又其理ヲ説クハ專ラ儒教ニ基カンコトヲ要ス

第二款 和漢文 和文ハ本邦固有ノ文章ニシテ其用極メテ廣ク漢文ハ

普通ノ文材ニ資スル者ニシテ亦須要ノ科ナレハ各級ニ通シテ之ヲ課ス今其學習ノ爲メニ分チテ讀書、作文トス  
讀書ノ要ハ讀法ヲ正クシ意義ヲ詳ニシ兼ネテ作文ニ資スルニ在リ故ニ初等中學校ノ和漢文ハ誦讀、講義等ノ法ヲ用キテ文字ノ音訓、音聲ノ抑揚、句讀ノ斷續ヲ明ニシ字義、句意、章意ヲ解セシムルヲ旨トシ殊ニ和文ハ先ツ文字、言語、文章、音韻ノ諸論ヲ教ヘ次ニ雅馴ノ文章ヲ授ケテ其例格ヲ考究セシムヘシ高等中學校ノ漢文ハ更ニ教方ヲ高尚ニシ委ク文章ノ賓主、照應、抑揚、頓挫等ノ諸法ヲ説キ詳ニ文理ニ通曉セシメンコトヲ要ス

作文ノ要ハ思想ヲ表彰シ事實ヲ記述スルニ在リ乃チ初等中學校ノ假名交リ文、書牘文ハ近世ノ雅馴ノ文體ニ倣ヒテ之ヲ作ラシメ漢文ハ古雅ノ文體ニ倣ヒテ單簡ノ記事文ヲ作ラシムヘシ高等中學校ノ和文ハ中世ノ雅馴ノ文體ニ倣ヒテ之ヲ作ラシメ漢文ハ記事文ヨリ論說文ニ

及ホシ詩及歌ハ先ツ古人ノ詩歌ヲ記誦セシメ稍句調ニ熟シ格律ヲ曉ルノ後歌ヲ詠シ詩ヲ賦セシムヘシ凡和漢文ヲ作ラシムルニハ文章簡明、句調暢和、且着實ニシテ例格ニ合スルヲ旨トシ其文題ハ務メテ實用ニ適スル者ヲ撰フヘシ但詩歌ハ韻調正雅ニシテ趣味優美ナランコトヲ要ス

第三款 英語 英語ハ其用殊ニ廣キ外國語ニシテ中人以上ノ業務ヲ執リ又高等ノ學科ヲ修ムルニハ其知識ヲ要スルモノ多シトス故ニ各級ニ通シテ之ヲ課ス今其學習ノ爲メニ分チテ綴字、讀方、譯讀、讀書、文法、修辭、習字、作文トス

綴字 英語ヲ教フルノ始ニ於テ之ヲ課シ文字ノ名及音、母音、子音ノ區別、分音法等ヲ授ケ以テ發音ヲ正クスルヲ旨トス稍習熟スルノ後ハ教師時ニ單語、短句ヲ唱ヘ生徒ヲシテ或ハ之ヲ分音和誦セシメ或ハ之ヲ書取ラシメ以テ綴字ノ法ヲ會得セシムヘシ

讀方ハ稍緩字ノ法ヲ解スルノ時ヨリ之ヲ課ス其要ハ音聲ノ抑揚、句讀ノ斷續ヲ明ニシ以テ讀法ヲ正クシ聽者ヲシテ容易ク意義ヲ會得セシムルニ在リ且誦讀ノ際音調ヲ正クシ狀貌ヲ整ヘシメンコトヲ務ムヘシ

譯讀ハ讀方ヲ課スルノ際之ヲ授ク其要ハ英語ヲ邦語ニ譯シ意義ヲ了解セシムルニ在リ其譯スル所ノ語句ハ自ラ章ヲナシ或ハ之ヲ誦シ或ハ之ヲ筆シ得ルニ至ラシメンコトヲ務ムヘシ  
讀書ハ讀方、譯讀ヲ兼ネ授クル者トス之ヲ授クルニハ生徒ヲシテ讀方ヲ正クシテ章句ヲ誦讀セシメ教師其意義ヲ講明シ或ハ生徒ヲシテ之ヲ解釋セシメ遂ニ直讀以テ其意義ヲ了解スルノ力ヲ養成スルヲ旨トシ又時ニ書中緊要ノ章句ヲ書取ラシメ以テ聽感ヲ練リ筆記ニ慣レ綴字ニ熟シ兼ネテ行文ノ例格ヲ知ラシムヘシ  
文法及修辭ヲ授クルノ要ハ英語ヲ理會スルノ力ヲ鞏固ナラシメ其實

用ヲ助クルニ在リ乃文法ニ依リテ言詞、章句ノ法則、用格等ヲ知ラシメ修辭ニ依リテ言論、文章ノ潤色、活用等ヲ知ラシムルヲ旨トス  
習字ハ字形鮮明ニシテ運筆快捷ナランコトヲ要ス故ニ先ツ姿勢執筆ノ法ヲ授ケ次ニ大字細字ノ書法ヲ教ヘ漸ク運筆ニ習熟セシムヘシ  
作文ヲ授クルニハ先ツ卑近ノ文題ニ就キテ簡易ノ文章ヲ作ラシメ或ハ填語、正誤ノ法ヲ用キテ作例ヲ知ラシメ作文ノ思想漸ク進ムニ及ヒ記事文、書牘文ヲ作ラシメ又時ニ簡易ノ和文ヲ譯セシメ上級ニ至リテハ兼ネテ簡易ノ論說文ヲ作ラシムヘシ其構文、撰題ニ注意スヘキコトハ第二款ニ示スカ如シ

第四款 算術 算術ハ百般ノ學術、日用ノ計算ニ缺クヘカラサル者ナリ之ヲ授クルニハ數理ヲ推究シ術語ヲ解釋シ法則ヲ論證シ傍ラ簡法ニ通セシムルハ勿論實際適切ノ問題ヲ與ヘテ其應用ヲ試ミ施算正確ニシテ且迅速ナラシメンコトヲ要ス

第五款 代數 代數ハ記號、字母ヲ用キテ施算ノ繁冗ヲ省キ一術ヲ以テ許多ノ問題ニ活用スルノ便アルノミナラス數理ヲ詳明ニスルノ關鍵ニシテ數學ノ一基本トナル者ナレハ殊ニ順序ヲ正クシテ理論ヲ推究セシムヘシ

第六款 幾何 幾何ハ線、面、角、體ノ性質、關係及其測度法ヲ推究スル者ニシテ物ノ長短、容積等ヲ精測スルニ必要ナルノミナラス思想ヲ緻密ニシテ推理判斷等ノ力ヲ養成スル者ナレハ之ヲ説明スルニハ最詳細精確ナルヲ旨トス又常用曲線ハ普通ノ曲線ヲ撰ヒテ之ヲ授ケ其大略ヲ知ラシムヘシ

第七款 三角法 三角法ハ八線ノ性質、關係及三角形ノ測定法ヲ推究スルモノニシテ土地ノ高低遠近等ヲ測量スル如キモ亦多クハ此科ニ資ス之レヲ授クルニハ務メテ理論實算并ヒ進マシムヘシ

第八款 地理 地理ハ學術及生業上須要ノ者ナリ乃總論ニ於テハ用語

ノ定義、世界ノ形狀等ヲ授ケ日本地誌ニ於テハ全國ノ位置、廣袤、形勢、氣候、人民、邦制上ノ區劃等ヲ授ケテ各州ノ疆域、形勢、物產、人口、郡區、都邑等ニ及ホシ萬國地誌ニ於テハ海外諸國ノ疆域、形勢、氣候、物產、人民、都邑等ノ概略ヲ授ケ地文ノ科ニ於テハ地理上ノ理學ニ關スル事實ヲ授クヘシ凡ソ地理ヲ授クルニハ殊ニ本邦ニ詳ニシテ外國ニ略シ專ラ實用上ノ問題ヲ考究シ兼ネテ學理上ノ問題ニ及ハンコトヲ要ス

第九款 歴史 凡臣民タル者自國ノ沿革ヲ知ルコト最モ緊要ナレハ先ツ本邦ノ歴史ヲ課シ主トシテ建國ノ體制、風俗ノ變遷、政治ノ沿革、明主賢相ノ治績、忠臣義士ノ偉行、學藝ノ隆替、武備ノ張弛等ヲ講明シ民生ノ休戚ハ常ニ皇室ノ隆替ト相從フノ實跡ヲ說キ務メテ尊王愛國ノ志氣ヲ振起センコトヲ要ス支那モ亦本邦ト最親密ノ關係ヲ有スル國ナレハ次ニ其歴史ヲ課シ終ニ他ノ海外諸國ノ歴史ニ及ホシ以テ其形勢ノ概略ヲ知ラシムヘシ

第十款 生理 生理ヲ授クルノ要ハ身體ノ健康ヲ保全シ且精神ヲ快活ナラシムルニ在リ故ニ人體ノ構造組織及機關ノ作用ヲ説キ兼ネテ養生法ニ及ホシ身體ノ發育保續スル所以ノ理、飲食運動等ノ節セサルベカラサルノ理ヲ知ラシメ以テ天賦ノ身心ヲ全クセシメンコトヲ務ムヘシ

第十一款 動物、植物、金石 動物、植物、金石ヲ授クルノ要ハ其名稱ヲ識リ其性質ヲ詳ニシ其效用ヲ辨ヘシムルニ在リ其教授ノ法ハ學理上ノ説ヲ講スルニ止マラス廣ク農工商ノ實用ニ供スルノ方ヲ索メ且主トシテ本邦産スル所ノ動物、植物、金石ニ就キテ之ヲ講明スヘシ又金石ノ科ハ其終ニ於テ地質ノ大意ヲ授ケ地層ノ構造、種類等ヲ知ラシメ採鑛術ノ端緒ヲ開カンコトヲ要ス

第十二款 物理 物理ハ宇宙萬有ノ形態上ノ現象ヲ講明スル者ニシテ諸科ノ學術ト親密ノ關係ヲ有シ殊ニ百般ノ工藝技術ノ進歩ヲ助ケ其

用極メテ大ナレハ先ツ初等中學科ニ於テ其大略ヲ授ケ高等中學科ニ至リ一層精密ニ諸現象ノ法則、關係等ヲ授ケ次ニ氣象ノ大意ヲ授ケテ氣中現象ノ一斑ヲ知ラシムヘシ

第十三款 化學 化學ハ物質ノ成分變化ヲ講究スル者ニシテ他ノ理學ノ蘊奧ヲ闡クコト多クハ之ニ依リ又百般ノ製造技術ヲ資ケ其用極メテ大ナレハ先ツ初等中學科ニ於テ通常ノ非金屬及金屬元素其化合物ノ大略ヲ授ケ高等中學科ニ至リ一層精密ニ無機化學ノ全論ヲ授ケテ有機化學ノ大意ニ及ホシ以テ化學ノ全體ヲ知ラシムヘシ  
以上掲クル所ノ化學、物理、動物、植物、金石、生理、地理ハ器械上ノ試験又ハ實物、標品、模型、繪圖等ノ觀察ニ依リテ明晰着實ノ教授ヲ施シ其眞理ヲ了解セシムルコト最モ緊要ナリトス

第十四款 經濟 經濟ハ利用厚生ノ學ニシテ其理深奧ナレハ其要領ヲ摘ミテ之ヲ授クヘシ凡ソ經濟ヲ授クルニハ實用ヲ主トシテ理論ニ馳

セス且一家ノ説ク所ノミニ偏倚セサランコトヲ要ス

第十五款 記簿 記簿ハ資財ノ出納ヲ登記算定スルノ法ニシテ亦須要ノ科トス乃チ先ツ諸帳簿ノ用法ヲ授ケ次ニ實地記入ノ法、試算表ヲ製スルノ式、正算表ヲ製シテ決算ヲナスノ式及手形證書ノ式等ヲ授ケテ之ヲ練習セシムヘシ

第十六款 本邦法令 凡臣民タル者ハ本邦現行ノ法令ヲ知ルコト緊要ナリトス故ニ此科ニ於テハ日常知ラザルヘカラサル者即チ戶籍、財産、營業、教育、衛生、兵役、賞罰等ニ係ル諸法令ノ要略ヲ授クヘシ但之ヲ授クルニハ成文ノ意義ヲ知ラシムルヲ旨トシ其理ヲ講スルヲ要セス

第十七款 習字 習字ハ筆力遒勁ニシテ字形正雅ナルヲ要ス故ニ先ツ姿勢執筆ノ法ヲ授ケ漸ク間架結構ヲ練習セシメ稍熟スルノ後ハ時ニ細字ヲ速寫セシメ以テ日常ノ應用ニ慣レシムヘシ

第十八款 圖畫 圖畫ハ言語、文字ノ及ハサル所ヲ寫出シ其用甚タ廣ク

殊ニ工藝上缺クヘカラサルノ科ナレハ各級ニ通シテ之ヲ課ス之ヲ授クルニハ自在畫ハ先ツ執筆運筆ノ法ヲ練習セシメ次ニ範本又ハ模型ヲ示シ其法則ヲ授ケテ之ヲ臨寫セシメ漸ク進ミテ實物ヲ臨寫セシムヘシ用器畫ハ先ツ其法則ヲ授ケ次ニ問題ヲ與ヘテ之ヲ考究セシメ漸ク進ミテ實用ニ及ホスヘシ凡ソ圖畫ハ排列ノ法其宜ヲ得光線陰影ノ法等其度ニ適センコトヲ要ス

第十九款 唱歌 唱歌ノ要ハ專心情ヲ感發シ以テ脩身ニ資スルニ在リ故ニ各級ニ通シテ之ヲ課ス乃先ツ單音唱歌ヲ授ケテ複音唱歌ニ及ホシ次ニ主トシテ諸重音唱歌ヲ授クヘシ凡唱歌ハ音律ヲ正クシ聲調ヲ和スルヲ旨トスル者ナレハ樂器ハ風琴、箏、胡弓等ノ如キ音調純正ノ者ヲ用キ歌詞ハ趣味高雅優美ニシテ道德上ニ裨益アル者ヲ撰ハンコトヲ要ス

第二十款 體操 體操ノ要ハ身體ノ發育ヲ平等ニシ健康ヲ保全セシム



ルニ在リ故ニ先ツ美容術ヲ授ケ次ニ徒手體操、輕體操、重體操ヲナサシメ兼ネテ步兵操練ノ初歩ヲ演習セシムヘシ

但每學期活力統計表ヲ製シテ其成果ヲ證明センコトヲ要ス

(註) 明治十五年五月、「教授規則」中第九條

〔二二五六〕 文部省第一一年報

學科

上等本科六級 第六級ニ始リ第一級ニ終ル

國書 手藝 英學

下等本科六級 同前

國書 英學 手藝但第三級以上之ヲ教フ

雜工

豫科四級 第四級ニ始リ第一級ニ終ル

國書

學科教授書籍名

單語篇、皇國史略、西洋史略、支那史略、世界國盡、日本國盡、窮理圖解、學問のすゝめ、性法略、養生法、習字初歩、啓蒙智恵ノ環、輿地誌略、內國史略、西國立志篇、勸善訓蒙、地學事始、啓蒙手習ノ文、童蒙教草、ウユルソソリードル、ユニヲソソリードル、フレエスブック、クエツケンブス文法書、コルネル小地理書、ウユルソソンスベルリング、スクウルレジステル、ヘルテルスアリソメチイク、英和字彙、英和辭書、ヘボン氏辭書、ユニヲソソライマル

(註) 「東京女學校」中の學科教科書の條

〔二二五七〕 文部省第四年報 第一冊

下等女紅場教則 甲科初級 讀物五十音啓蒙智恵の環一二ノ卷 習字兼書取綴字單語習字本 算術加法減法(珠算ヲ用フ) 同中級 讀物啓蒙智恵之環三ノ卷本朝列女傳地理初歩兼テ地球儀ヲ用ヒテ地球ノ形狀方

位運動晝夜寒暑等ノ理ヲ懇ロニ説示ス 習字兼書取兼テ縣下三州ノ地名物産等ヲ書取ラシム算術乘法除法(珠算)兼テ筆算數字書キ方及加法ヲ教フ 同上級 讀物家の基窮理圖解兼テ萬國地圖ヲ用ヒテ各國ノ位置著名ノ港灣名山大川及ヒ都府物産等ノ概略ヲ教フ但シ書キ取シムルコトモアルヘシ 習字女子日用書翰ノ文ヲ綴ラシム 算術四則應用(珠算)乙科初級 縫物裁物單物袷綿入木綿小形ノ類糸操綴糸 同中級 縫物裁物單物綿入袷羽織木綿中形ノ類 糸操縫糸縞地糸 組物附養蠶方口授但糸操之日四ツ組八ツ組 同上級 縫物裁物絹服洋服雜品 組物附養蠶並方法口授十六組三十二組 織物白木綿縞木綿 飲食調理方口授組物之日

上等女紅場教則 下級 讀物日本略史(但文部省出版ノ書ヲ用フ)修身論作文公私用文及諸證券ノ文ヲ作ラシム 算術(筆算)四則應用ヲ教フ 上級 讀物萬國史略小學物理書 作文同前 算術比例法ヲ教フ(珠算筆算)

縫物裁物洋服和服 裁物織物 養蠶製糸 飲食調理方

(註)「堺縣年報」中、女紅場教則

〔二二五八〕文部省第七年報

生徒入學ノ年齢ハ滿十四年以上トシ在學ハ二ケ年ヲ期トス、生徒ノ中若シ一課或ハ二課ヲ學ハント欲スル者ハ已ニ實際商賣等ニ關係シ他ノ學科ヲ學フノ餘暇ナキ者ニ限ル、教授ノ科目ヲ區別シテ左ノ五項トス 第一項 素讀講義及語記 地理學、商業用理學、商業用化學、器械學、電信機圖解、天然物産書、經濟學、商業要件錄、郵便規則、銀行論、諸製造書、海陸運輸規則、結社歴史、商賣沿革論、商法律等 第二項 算術 加減乘除、諸等數、比例、利足算、平均法、損益法、利益分配及放銀法、容積法、商業用早算、重利及年賦金法、其他商賣必用ノ算術 第三項 習字作文及書取 平假名、片假名、數字、度量衡ノ名稱、兵庫神戸名頭、兵庫神戸町盡、兵庫縣管内地理盡、日本物産盡、諸

商賣工業名盡、貿易輸出入物名、商人往復書狀、諸證書式、約束諸書式、爲換手形類、荷物送狀類、諸願届書類、其他商賣ニ關スル書式 第四項 帳合法 兵庫港仕來り諸帳合、略式帳合法、本式帳合法、銀行簿記精法、右第一項ヨリ第四項迄ハ唯學フ可キ科目ヲ掲ケタルノミニシテ強テ此順序ヲ逐テ教授スルニ非ス且第一項ヨリ第四項迄ハ之ヲ同時ニ教授スルモノトス第五項ニ至テハ前項ヲ卒リタル者ニ非サレハ之ニ移ルヲ得ス 第五項 實地演習 第五項ハ則生徒ヲシテ既ニ學ヒ得タルモノヲ實地ノ商賣取引ニ擬シ活用セシム故ニ此演習ヲナサシムルニハ講習所内ヲ數局ニ分チ即郵便、電信、運送問屋、製造問屋及銀行等夫々一局ニ一事ヲ宛テ生徒ヲ各局ニ分置シ商業ヲ營マシム且假ニ紙幣ヲ造テ之ヲ授ケ賣買ノ際ニ用ヒシメ恰モ講習所内ヲ種々ノ商店ニ擬シ互ニ相集リテ商賣取引ヲナサシムルノ趣向ナリ

(註) 「兵庫縣年報」中「商業講習所」の條

## 解 說

最近世の教育の内容は、出來得る限り多くの分量の知識を授け、日常生活の必要に應ずる目的から、取材の範圍を擴大すると共に、大きな學科課程の組織をなすに至つたのである。明治維新を經ると共に、直ちに從來の教育内容に對する批判の眼が向けられた。學制頒布の仰出され書のうち於て、従前の士以上のものゝ教育内容を詞章記誦といひ空理虛談といひ、それが如何に高尚に見えても、身に行ひ事に施すことの出來ないものであると指摘した。同様な批判は寺子屋の教育内容に對しても向けられてゐるのであつて、手習師匠の教は實學になつてゐないからこれを改めなければならぬ。文明開化の世に叶ふ教育内容をもつた習字手本が成立し、教育の内容が改められなければ、現時には妥當しないと見てゐる(二三四八)。從來庶民教育の内容は、読み書き算盤でつくされてゐた。それも總ての寺子屋がこれを揃へて授けてゐたものではなかつた。多くは習字を主としてそれに読みを加へる程度であつた。勿論習字の内容をなすものは、各方面の事項に互つてはゐたが、これを習字なり讀書なりに綜合し得たのであつて、學科課程の近代的な分化は未だ全然見られなかつたのである。然るにこの寺子屋を改造した小學校に對して要求された教育

の内容は、最初から歐米諸國の近代的學科課程を参照した極めて複雑なものであつた。明治五年九月公布した「小學教則」は、學制の中に掲げられた小學校の學科を基本としたものであるが、更に細かく分化して、大きな組織となつてゐる〔二三四九〕。斯くの如き大きな組織の學科課程は結局普通學を授ける爲のものであつて、それが従來の讀書、習字、算術に止まらず、理學、養生、地理、歴史、圖畫等を教育の内容として重要な位置に置くに至つたのである〔二三五〇〕。これ等の新しい教育の内容を速かに普及せしめる爲に、文部省が卒先して教科書の出版をなし、教材の新しい形を示すことゝなつた。民間にあつても文部省の意向に従ひ、新しい教科書の出版が續々として行はれた。間もなく非常に多くの教科用書が整へられるに至つた〔二三五二〕。

併し一般の小學校に於ける教育の内容は、依然として讀書、習字、算術の三基本教科に限られてゐる有様で、唯讀書や習字に新しい教科用書が使用せられ、算術には算盤の他に洋算が加へられる程度であつた。これを改造する爲に必要な第一着手をなしたものは、東京の師範學校で實地の經驗に基いて編成された小學教則である。この教則は師範教育に依つて全國の小學校に普及したが、これは讀書習字の他に書取作文を分化させ、問答といふ中間的な學科を設け、野畫、體操を加へたものである〔二三五二〕。近代的な學科課程として小學校の教科が分化したのは、明治十四年の小學校教則綱領が公布せられてからである。この教則に關する規程中に於いては、讀書、習

字、算術の他に、修身、地理、歴史、博物、物理、化學、生理、幾何、經濟、圖畫、唱歌、體操、裁縫が加へられるに至つた。この日常生活の要求に基いた知識技術の廣い領域に互つた教科内容が、一般人に對する普通教育の材料として整へられるに至つたことは、教育内容の近代化を示すものである。その各科の要旨を掲げた各條項を見るならば、それらの内容が、如何に近代化して來てゐるかを容易に知ることが出来る〔二三五三・二三五四〕。

中等教育のための諸學校に於いても同様な事情にあつたことが知られる。従來士以上のものが高等の教養を受ける場合に於いて、文の教育内容は經書や史書を主たる位置に据えたのであつた。これを近代的な學科課程に組織する迄には年月を要したのであつて、明治十四年の中學校教則綱領は近代化のために時期を劃したものであつた。これを實際の教育に行つた例は、當時唯一の官立中學校であつた大阪中學校に於て見ることが出来る〔二三五五〕。同様な事情は女子の中等教育機關に於いても、或は商業學校等に於いても一樣に認められるものであつて、近代化の有様は各學校の性質に依つて特殊化されて現はれてゐる〔二三五六―二三五八〕。

## 第五章 教育の方法

〔二二五九〕文部省第六年報

授業法ハ各地師範學校ニ於テ重要ナル學科ト爲シテ之ヲ傳習ス蓋シ其濫觴ハ東京師範學校ニ在リテ而シテ文部省該校ノ卒業生ヲ各地ニ派出シタルノ後各師範學校悉ク其法ニ倣ハサルハナシ本校ニ於テモ亦本科第三級ヨリ授業法ノ科ヲ設ケ一週五時乃至六時ノ課業トス是レ四五年前ノ如ク一人ノ教師ニシテ數十人ノ生徒ヲ教授スルノ方法ハ未タ世人ノ領知セサルノ日ニ在テ小學教員ヲ養成スル爲メニ緊急ノ一學科タルハ論ヲ俟タス

〔註〕「東京女子師範學校年報」中「授業法ノ事」の一節

〔二二六〇〕文部省第五年報

第一冊

本縣ハ從來縣地ノ離合少キヲ以テ小學教授法ノ如キモ亦管内皆一轍ニ出ツ而シテ其小學教則ノ凡例中ニハ生徒學術進步ノ都合ニヨリテ學期ヲ斟酌増減スルハ教師ノ意ニ任スヘキノ明文アリト雖如何セン年少ノ教員等其器ニ乏シキモノ多ク只教則ノミヲ墨守シテ授業ノ際絶テ活潑ノ氣風無ク常ニ目ヲ自ラ携フル所ノ小學教授要本ニノミ注キ毫モ意ヲ生徒ノ舉止動作ニ留ムルノ暇ナクテ其狀況ヲ概言スレハ教員ハ唯其課業書ヲ讀過スルニ過キサルノミ且夫ノ村落學校ノ就學生ノ如キハ概ネ皆貧窶ノ狀アリテ縷衣ヲ纏ヒ木床ニ倚リ石盤ニ代用スルニ銅葉木片ヲ以テシ山野ノ遠路ヲ經テ來學スルモノ多シ然ルニ此ノ貧困ナル馬夫樵者等ノ子女ニ羅馬數字ノ書方ヲ教フル如キ迂濶ナル教授ノ死法ヲ施スモノ少シトセス是固ヨリ興學日未タ久シカラサルヲ以テ願フニ各地方ノ通患タルコトヲ免レサル所ナラン然レトモ子女ヲシテ其父母ヲ助ケ

テ家業ニ役々スヘキ至重ノ光陰ヲ斯ノ如ク迂遠ナル教育ニ浪費セシムルノミナラス幼年心身ノ發育ヲ妨害セシムルハ豈惜ムヘキ事ニ非スヤ

(註) 「學區巡視巧程」中秋田縣に於ける「教授法」の條

〔二二六一〕 下等小學教授本

伊呂波圖の教法は、圖を教席に掲げ、教師策を以て、上位の生徒一名に命て、逐次其下位の生徒に及び、一回授了ば、教師再び策を揚げ、坐中の生徒をして聲を齊く、誦讀せしめるを、教授の法とす、

(註) イロハ圖教法

〔二二六二〕 小學教授要本

一 策ニテ授クベキ圖中ノ字一連句ハヲ指シ末席ヨリ番號ヲ呼ビテ讀ヲ授ケ數名ニ至リ全員ヲシテ齊讀セシメ了リテ次生ヨリ讀ヲ授ク亦斯ノ如

シ

二 積テ數字ニ至レバ一率トシ該率ヲ一名ヅ、讀ヲ授ク數名ニ至リ全員ヲシテ齊讀セシム餘ハ前條ニ同ジ

三 首席ヨリ順次一率ヲ獨誦セシメ誤リアレバ不順ニ他生ヲ指シ之ヲ正サシム

四 一列或ハ一場齊讀セシム

五 圖ヲ撤シ七級以上ハ書ヲ閉ヅ所授ノ字ヲ板上ニ書シ不順ニ之ヲ問ヒ數名ニ至リ齊讀セシム積テ數字ニ至レバ又齊讀セシメ了リテ一名ヲ指シ之ヲ讀シメ齊讀後意義ヲ知ル者ハ手ヲ舉ゲシメ之ヲ問フ

六 伊呂波圖ヲ授クルトキハ五十音ト比較シテ彼此等シキヲ示ス

七 單語連語ハ物體ノ性質及ビ用法等ヲ講ジ其意味ノ大要ヲ說示ス

但シ教師講ジ畢リテ生徒ニ於テ尙不審ノ件アル者ハ立チテ之ヲ問フ

(註) 「授業法」中第八級授讀の一節

〔二二六三〕 小學教授要本

一 讀本ヲ授クルニ最初ハ一日凡ソ二三行ヨリ漸次半枚ニ至ル  
二 初メハ必ズ當日授クベキ句ヲ塗版ニ記シ鞭ニテ其字ヲ指シテ教ヘ了  
リテ復タ其書ニ就キテ教ウ

但シ塗版ニ記スルハ本日ノ授クベキ所ヲ一時ニ掲書スルモ兩三度  
トナスモ便宜タリ

三 末席ヨリ一人宛數句ヨリ漸次數行ニ至ル迄ヲ授ク

四 衆生一齊ニ授クルコト數回ナリ

五 現ニ授ケシ所ヲ一人ニ數句或ハ數行讀シメ順次各生ヲシテ幾度モ反  
覆セシム

(註) 「授業法」中第七級授讀の一節

〔二二六四〕 文部省第六年報

黑板ハ算術ヲ教授スルニ當リ極メテ有益ナルモノタレハ生徒ヲシテ屢  
黑板ニ就キテ算術ノ諸例ヲ試習セシムルトキハ唯石板ノミヲ用ヒシム  
ルヨリモ其效更ニ多カルヘシ故ニ每教室必ス數多ノ黑板ヲ備ヘンコト  
ヲ要ス

(註) 「學事巡視功程」中「東京府下公學巡視申報」の一節

〔二二六五〕 文部省第四年報  
第一冊

〔五十音〕 五十音ハ文法學ノ初步ニ學フヘキ者ニシテ初學生徒ノ誦誦ニ  
ハ至テ不便ナル者ナリ其故ハ五十音ハ母音ハ母音ノミ集マリ舌音ハ舌  
音ノミ集マリ喉音ハ喉音ノミ集マリ居ルヲ以テ之ヲ誦スルニ音調停滯  
シテ流暢ナルコト能ハス伊呂波ハ子母喉舌相交リ其調ヲ整ヘタル者ナ  
レハ之ヲ誦スルハ甚タヨク口ニ上レリ既ニ歐米ノ二十六字モ其順序ノ  
組立ハ我伊呂波ノ如ク子母喉舌等ヲ相交ヘタリ伊呂波ヲ棄テ五十音ヲ

誦セシムルハ國學者ノ理論ニ出テ到底文字ノ妙ヲ知ラサル者ノ説ナリ  
〔單語問答〕 下等小學第八級ノ生徒ノ學フ所ニシテ文部省製ノ單語圖ヲ  
掲ゲテ一々其性質功用ヲ教ヘ教師之ヲ問ヒテ生徒ヲシテ之ニ答ヘシム  
八級ノ生徒唯教師ノ口眞似ヲスルノミニテ心ニ會得スル所ナシ是ヲ學  
フニ半年ノ日月ヲ費シ八級ヲ畢リテ七級ニ進ミ移リテ他ノ科目ヲ學フ  
ニ至レハ單語ノ問答ハ全ク忘却スル者十ノ七八ニ居ル單語問答トイフ  
コトハ歐米ノ小學ノ教則ニ未タ見サル所ナリ「オブゼクトレッソン」トイ  
フ者差々此單語問答ニ似タル者ナレトモ是ハ實物ヲ示シテ其性質功用  
ヲ教フル者ニシテ其實ハ同シカラサルナリ

〔書取〕 教師黑板上ニ物ヲ書シ生徒ヲシテ之ヲ書取ラシムルハ頗ル良キ  
法ナルヘケレトモ是ハ八級七級ノ生徒位ニ施シテ可ナルヘシ方今ハ八  
級七級六級五級マテノ生徒ニ書取ヲ爲サシムル者多クシテ其書ク所ハ  
單語圖連語圖小學讀本中ノ數語ニ過キス日月ヲ費ヤスコト多クシテ功

ヲ收ムルコト少ナシ

〔羅馬數字〕 羅馬數字ハ時辰儀ノ符號位ニテ其他ハ少年輩ノ實施スヘキ  
所ナシ又此數字ハ固ヨリ筆寫スヘキ者ニアラス方今ノ教授法ハ多ク之  
ヲ筆寫セシメ數千萬ノ多キニ至リ甚シキハ是ヲ以テ加減算ヲ爲サシム  
ルニ至ル無益ノ勞ト云フヘシ(但シ亞刺伯數字ハ必用ノ者ナレハ之ヲ筆  
寫サスルハ適當ノコトナリ)

〔習字〕 方今習字ノ法ハ楷書ヲ先キトシテ行草ヲ後ニスハ支那ノ書家  
ノ理論ニ基ク所ナルヘケレトモ甚タ實用ニ適セス故ニ小學ニ入ルコト  
二三年ニシテ受取書一ツヲモ書得ルコト能ハス迂濶ナル授業法ト云フ  
ヘシ(或ル學校ニテハ一字毎ニ教師ノ命令ヲ待テ筆ヲ下ス者アリ拘泥ノ  
甚シキ者ト云フヘシ)

〔色圖〕 色圖ハ童子ニ七色ヨリ其他ノ重立タル色ノ名ヲ教フレハ事足ル  
ヘシ然ルニ方今ノ教授法ハ正色間色或ハ二等色三等色ナト、イヘル光



學專門ノ語ヲ教フルヲ以テ童子ハ其何故タルヲ解セス唯教師ノ口眞似スルノミナリ

〔形體線度圖〕是又童子ニ四角トカ三角トカイヘル物ノ形體ヲ知ラシムレハ足レリ然ルニ現今ノ授業法ハ四角ニハ面幾許アルヤ傾度ハ幾度角數ハ幾許鈍角カ銳角カナトイヘル幾何學ノ初步ノ語ヲ教フルヲ以テ童子ノ其義ヲ解スルコト能ハサルハ色圖ニ同シ

〔語算〕語算ヲ教フルハ至極良法ナレトモ童子ニハ加減タケヲ教フルヲ以テ足レリトスヘシ方今ハ分數ノ如キニ至リテモ亦語算ヲ以テ教フルノ學校アリ無益ニ生徒ノ腦力ヲ費ス者ト云フヘシ

〔暗射圖〕暗射地圖ヲ教フルモ亦良法ナリ然レトモ方今教フル所ハ細密ニ過キ神社佛閣及ヒ其位階マテモ暗射セシムルニ至ル又其圖ノ製方多ク宜キニ適セサルヨリ生徒等圖ニ對シテ應對明白ナレトモ其地ニ至レハ却テ方向ニ迷フ者多シト云フ

〔算術〕算術ハ別ニ論スヘキコトナケレトモ動モスレハ其問題ニ迂遠ノ箇條アリテ舊來ノ和算ノ相場割ノ如キ親切ニ及ハス且ツ小學ノ算術ニ幾何代數ヲ教フルノ學校アリ高上ニ過キタリト云フヘシ又生徒ニ算術書ヲ與ヘサルノ學校アリ自修ノ道ヲ塞ク者トイフヘシ

〔作文〕小學校ニテ教フル作文ノ弊ハ浮華虛飾ニ流ル、ニ在リ未タ日用書翰ノ文モ出來サル者ニ高等ノ文題ヲ與ヘ或ハ華麗風流或ハ高妙怪僻ノ語ヲ用ヒテ文章ヲ作ラシムル者多シ愈力ヲ勞シテ愈實用ニ遠サカル者ト云フヘシ

〔修身學〕凡ソ世界諸國ノ教育ハ皆修身ヲ以テ本トセサルハナシ即チ歐米ヲ以テ言ヘハ耶蘇教法ハ即チ修身ヲ專ラトスル者ナリ其他支那ハ言フニ及ハス印度ト云ヒ波斯ト云ヒ亞刺伯ト云フモ其國ノ教育ハ皆宗教ニ本ツキ宗教ハ皆修身ヲ主トセサルハナシ獨本邦ノ教育ノミ孔孟ノ道ヲ廢シ又耶蘇ノ教ヲ取ラス故ニ今日身ヲ修メ人ニ接スルノ道ニ於テ倚

信スル所ナク人々勝手ノ説ヲ立テ遂ニハ邪論曲説其間ニ起リ世道人心ニ大害ヲ爲スモ計リ難シ故ニ修身ノ一事ハ殊ニ教育ノ任ニ當ル者ノ注意スヘキコトナルヘシ方今小學校ノ修身ノ教ハ只教師タル者ノ口授ニ留マリテ其他ニ及ハス歐米ノ小學教則中ニハ大抵神教ノ一科アリテ或ハ經典ヲ誦讀セシムル者アリ或ハ神歌ヲ歌誦セシムル者アリ或ハ之ニ修身口授ノ一科ヲ加フル者アリ其力ヲ修徳ノ道ニ用フル至レリト云フヘシ本邦ニテハ修身學ノ根基トスル者ナキカ上ニ方今教員ナル者ハ其中或ハ淺學短識ノ少年ニシテ自己ノ品行モ修マラス道德ノ理ニモ通達セサル者アリ此ノ如キ教師ノ口授ノミヲ以テ修身ノ科目ヲ濟マセントスルハ甚タ危殆ナルコトト云フヘシ

(註) 「第二大學區巡視功程附録」中

〔二二六六〕 文部省第三年報 第一冊

授業ノ方法ハ未タ完然タルモノト云フ可ラサレハ此他ノ學校ニ至テハ師範學校ノ教則ニ因ルモノアリト雖其教方ハ一モ宜キヲ得ルモノナシ殊ニ書器等ノ備ハルアルヲ見ス其甚シキハ教師親ラ世界國盡ヲ謄寫シテ生徒ニ配當シ纔ニ其素讀ヲ教フルモノアリ

(註) 「督學局年報」中青森縣の條

〔二二六七〕 小學教授要本

單語圖ヲ用ヒテ諸物ノ性質及ビ用キ方等ヲ問答ス  
一圖中間フベキ物ヲ指シ生徒ノ番號ヲ呼ビテ其名稱ヲ唱ヘシメ畢レバ座セシム齊讀後又生徒ヲ指シ立チテ答ヘシム  
二問答ハ生徒一名ニ付物品ノ性質及ビ用法ノ一ヲ答ヘシム  
但シ成丈實物ヲ以テ示スヲ善トスルナリ

(註) 「授業法」中第八級問答の條

〔二二六八〕 静岡縣小學教則

總テ口授ハ本科ノ豫習ニ備ヘ且其不足ヲ補ヒ以テ幼智ヲ開發スルヲ旨トス故ニ須ラク本課用書ノ說ニ基キ其說キ方ハ總テ卑近ニシテ生徒ノ曉リ易キヲ旨トス

(註) 明治九年八月改定布達「小學校教則凡例」中の一節

〔二二六九〕 文部省第三年報 第一冊

教科順序ハ課業表并時間表ニ照シテ讀書教員ヨリ問答口授輪講ノ課ヲ兼ネ習字教員ヨリ書取ノ課ヲ兼ネ算術教員ヨリ誦誦ノ課ヲ兼ヌヘシ讀書習字算術ノ三科鼎立偏廢スヘカラサルハ學制ノ定則トイヘトモ年齒特ニ長スル者ハ日暮レ途遠ク定則ニ從事スル能ハス然レトモ其志特ニ切ナル者ハ爲ニ夜學ヲ設ケ其所好ニ從テ單ニ學課中ノ一科或ハ二科ヲ修業セシムルコトアルヘシ

(註) 「岡山縣年報」中「小學校定規附錄」第一條

〔二二七〇〕 文部省第三年報 第一冊

總テ教科書讀方講義ニ於テハ上等小學ヲ卒業セント雖語記問答ニ至テハ大ニ劣レルヲ覺フ書中主眼ノ條目(此條目下等科五級或ハ四級位ノモノ)一二ヲ舉テ之ヲ問フニ聲ニ應シテ答フルモノナシ此弊ヤ當縣下小學校授業ノ法其宜ヲ得ス下等ト雖讀方ヲ主トシテ能ク意ヲ語記問答ニ用キザルニヨル殊ニ此生徒ノ如キ上等科ヲ修ムル日淺キヲ以テ授業法ノ熟セサル論ヲ待タサルナリ抑普通學科ヲ卒業スルヤ日用常行上ニ於テ不便ナキヲ主トスルニアリ是上等科卒業ニ至ルマテ語記問答ニ時日ヲ費ヤス所以ナリ此ヲ知ラスシテ速ニ卒業ニ至ルハ下官等ヨク其意ヲ解スル能ハス教員高野隆非常ニ勉勵授業セシハ賞スルニ足ルト雖モ生徒ニ於テハ其學業進歩ナキハ眞ノ卒業ト云ベキニ非サルカ今回僅五ヶ月

餘ニシテ上等ノ科ヲ卒ヘシムルハ一ハ父兄ノ心ヲ慰安シ二ハ人民ヲシテ學事ニ向ハシメンガ爲メナリト雖生徒學業熟達セサレハ其功顯ハレス只上等科ノ書籍ヲ通讀セシモノト云テ可ナリ算術作文ノ兩科ハ稍其等ヲ得ルヲ覺フ然ルニ猶眞ノ實用ニ適シ難キモノアルハ蓋月日少キヲ以テナリ

(註) 「督學局年報」中「新治縣小學生徒試驗功程」の一節

〔二二七〕 文部省第五年報  
第一冊

學校ニ於テ常ニ活用シテ授クヘキ農工商共ニ必要切近ノ事ハ先ツ帳簿ノ記方受取證文願書届書受書ノ式及日々矚目スル所ノ物名及ヒ物價ノ概略ナリ其他讀本中ノ文字熟語文章ヲ活用セシメ并ニ艸書行書ニ書クトモ能ク解讀シ得ルヲ緊要トス、講義又ハ熟語ヲ授クルニハ譬へハ山ノ字ヲ教へ及山ハ如何ナルモノカヲ教フルニ或ハ教場ノ窓戸ヲ開キテ現

ニ山ヲ指示スルカ又ハ板上ニ描出シテ其高低及ヒ艸木ノ繁茂シタル景況等ヲ教授シ或ハ遙ノ字ニ就テハ遠望シテ人家及ヒ高山ヲ認メ以テ遙字ヲ働カシメ其他海トイヒ河トイヒ陸トイヒ人類トイヒ鳥獸草木トイヒ風雨寒暑トイヒ事々物々言語想像形容實見ノ盡スヘキハ飽マテ之ヲ盡シ兩端ヲ叩キ類ヲ推シ生徒ヲシテ爽快感覺發憤ノ情ヲ起サシメ其之レヲ日用ニ運用スルノ知識ヲ得セシムルヲ專要トス、算術ハ物ヲ算シ數ヲ計リ日用至重ノ作業ト雖トモ只式題ト文題トヲ經歷セシメタルノミニテ之ヲ活用スルヲ知ラサルトキハ日用事實ノ算計ニ通セサルノ憂ナキヲ保セス苟モ如此ナルトキハ高價ノ時間ヲ學修ニ費シタル效驗ナキノミナラス隨テ算學ノ品位ヲ落スニ至ルヘシ故ニ式題文題トヲ習熟シタル生徒へハ其度ニ隨ヒ逐次活用ヲ試ミ類ニ觸レ教導示諭スルヲ勉ムヘシ譬へハ山間ノ僻邑ニ在ツテハ獸獵及薪炭果實等其土地ノ物産又ハ日々ノ運用品ニ付出入アリシヲ臨時文題ニ綴リ或ハ突然口頭ヲ以テ計

算差引等ヲ尋ネ之レヲ算セシムルノ類市中ニ在ツテハ物品貿易ノ計算等海邊ハ漁獵利潤諸差引等又ハ校内生徒ノ増減等級ノ多寡及ヒ家計諸道具并田畠ノ坪數割又ハ何坪ノ田ニハ幾把ノ苗株ヲ要スル等ノ如キ其土地相應切近ノ算計ヲ縷々問起シ學修ヲ世用ニ實適セシムルヲ肝要トス<sup>略</sup>○中 普通小學ノ習字ハ別ニ書ヲ以テ名譽ヲ顯ハシ或ハ蒞席ニ文墨ヲ弄スルノ爲メニアラス所謂思考論說ヲ發現陳述スルノ用及ヒ記簿ノ用ニ充ツルノ目的ヲ以テ授クヘキモノナレハ作文ト關係實ニ親密ナリ故ニ可成我年齡父兄ノ姓名等ヨリ書牘論說等ヲ述フルノ際字畫整齊展讀ニ差支ナク總テ切近ノ書記ニ通スルノ結果ヲ目的トスヘキナリ且ツ之ヲ書スル遲々セサルヲ要スヘシ

(註) 「石川縣年報」中「小學校授業法活用例」の一節

〔三二七二〕 高嶺秀夫先生傳

諸學校教授の有様を親しく視察し、又之を諸縣の人に傳聞するに、全く前の主義と反對せるものがあるが如し、其一例を擧ぐれば、物理學を教授するの法、或は徒に教科書を誦讀せしめて、能く文字を讀了すれば則ち物理學を理會したるものと見做し、且其試験の法も、亦物理書を出して之を通讀せしむるに止るものなきにあらず、是れ文字を先にし觀念を後にするなり、觀察比較を怠り語誦語記を専らにするものなり、定則定法の由て生じたる根原の實物實事に暗くして、漫りに高尚の論を唱ふ、之を空理に馳すと云はざるべけんや、特に物理學のみにあらず、其他の諸學科に於ても當今の教授法たるや、皆各々特別の知識を與へ心力を練磨養成するの效を奏することなく、數多の學科一に完全ならざる讀書科に異ならず、<sup>略</sup>○中古より我國に行はれたる教授の法は唯書を読むことを先とせり、故に兒童をして唯に解し難き高尚の文を誦讀せしむるを以て教授の第一着とせり、兒童は之を誦讀すること數年にして尙其意義に通ぜざること比々皆

然り、其心意の暢發を妨げ事物を採求するの念を壓殺するもの實に此の法より甚しきものなし、近來學風の一變せしより、教授上大に面目を新にせしものありと雖、未だ古來文字のみを教へて實物實事を忽諸に附せし弊風を脱すること能はず、教科書は知識を得る爲の方便なることを知らずして、單に教科書を講讀するのみを以て教授の目的となすものゝ如し、

(註) 明治十五年十二月文部省にて府縣學務課長への演說一節

〔二二七三〕 文部省第十一年報

博物及ヒ物理ハ中等小學ニ於テ之ヲ課ス此二科ノ教授ハ標品模型及ヒ器械ヲ要スルコト辨ヲ待タス然ルニ標品模型器械ヲ使用スルモノニ至テ尠ク徒ラニ教科書ニ由リ章句字義ヲ講授スルニ止ルモノ比々皆是レナリ

(註) 「學事巡視功程」中大阪府下小學校の條

〔二二七四〕 大日本教育會雜誌 第十一號

小學校の授業は概ね未だ宜を得ず之を例すれば初等科六級の生徒に繃絲の如き六ヶ數文字の讀方を教へ又初等科五級位の生徒「神は天地の主宰にして人は萬物の靈なり」の如き六ヶ數文句を解義せしむるものありて徒らに兒童の腦力を費耗せしむ書取は唯二三の六ヶ數文句を摘擧し之を書せしむるに止まり教育も亦其何用たるを解せさるか如きものあり算術を教ふるに生徒の計算了るを待ち其答をも問はずして直ちに之を説明する教員あり平常授くる所の問題も日用に適實ならざるものを出すもの少からず又珠算を授くるに大算盤を備へず唯々口にて其運珠の法を授くるものあり作文は徒に一樣の文字を用ひ其趣向も亦一樣なるもの多くして兒童の思想を教養するの手段に乏しく且つ文題の如きも多くは山に遊ぶの記等浮華に流るゝを免れず甚しきは教員之を添刪せず誤字あるも正さゝるものなきにあらざ習字も亦不充分なり臨本に

は肉筆あり版本あり中には臨本なく黑板に文字を書し之を習ふあり殊に筆の持ち方姿勢等を正すを見ず茲に最も憂ふべきは修身の教授なり即ち修身書を教ふるは恰も讀本を素讀せしむるが如く其格言事實を敷衍説話し教員躬行生徒を提撕し眞に之が徳性を感化せしむるが如きに至りては之を見ること罕なり又修身を授くるは多くは各級受持の教員之に任し耆徳者若くは主座教員にして之を負擔する者は殆ど之を見ず甚しきは年甫めて十年前後の授業生にして之を授るものある是なり地理、歴史、圖書、博物、物理、化學等の學科を教ふるものは之を見ること少きを以て詳に論じ難しと雖も其一二見る所を以てすれば地理を授くるに多くは地圖等を用ひず歴史を授くるに尊王愛國の志氣を養ふの目的を達するの法を得たりと云ひ難きものあり又事の地理に渉るものも地圖に依りて指示する等の事を見ず博物は實物標本を以て説明すること甚だ稀にして物理化學は近易の實地試験等を施し之を講明すること幾ん

と之なく偶之れあるも教員自己の爲めに實驗するが如く生徒唯啞然膽驚其如何なる理に由りて斯の如くなるやの要點に至りては殆んど解せざるものに似たり裁縫は市中の小學校にては大抵之を授くと雖村落に至りては之を授くるもの甚尠し是適當の教師を得ざると校費の少なき等に由ると云へり又體操は之を授くるもの多くして生徒の進歩も亦著し但女生徒に體操を授くるものは甚稀にして別に適宜の遊戯を以て之に代ふるものも亦尠なり之に改良する方法なくんはあるへからず

(註) 明治十七年二月十九日辻新次「學事巡視の概況」中岡山縣の條

〔二二七五〕 文部省第十一年報

修身科ハ初等六級五級ニ於テ修身訓畫ヲ用ヒ同四級以上中等科ニ於テ龜谷行ノ修身兒訓ヲ用ヒ共ニ其事蹟意味ヲ口授ス初等科ニ於テハ讀方ニ頗ル力ヲ費消シ又凡テ口授ノ仕方口寫シニ失スルモノ多ク其意味ヲ

了解シ徳性ヲ涵養スルカ如キ效用ハ尤モ期シ難キニ似タリ小學教科中最緊要ナル修身科ニ於テ最モ授ケ方ノ不完全ヲ感覺シタリ抑々該科ノ授ケ方ハ他ノ技術ニ係ル教授ノ如クナラス教師ノ素行徳望等ニ關スルコト勿論ナレトモ亦注意ノ精粗教法ノ功拙モコレ無シト云フヘカラス教育者宜シク反省スヘキナリ因ニ云フ修身訓畫ハ挿畫ノ掛圖ニシテ幼童ニ修身ヲ授クルニハ其感動ヲ惹起シ易クシテ頗ル佳ナリ然リト雖モ圖中掲載ノ事蹟或ハ小學兒童ニ適セサルモノアルカ如シ

(註) 「學事巡視功程」中大阪府下小學校の條

〔二二七六〕 文部省第十一年報

小學校修身ノ教授ハ讀方ノ教授ニ異ナル所ナシ地理歴史博物物理化學生理經濟ノ諸科ノ教授モ亦然リ詞ヲ替ヘテ之ヲ言ヘハ讀方ノ科ニ於テ此等各科ノ事ヲ載セタル書籍ヲ採用スルニ外ナラサルモノ、如シ讀方

ノ教授ハ素讀又ハ誦誦ニ止マリ字義句意章意等ハ之ヲ授ケサルモノ多シ

(註) 「學事巡視功程」中鹿兒島縣「小學科教授法」の一節

〔二二七七〕 教授の要旨

兒童ヲ教授スルニハ善ク其ノ心ヲ開透シテ明瞭ナル理會ヲ得セシメ兼テ正シク談話スルコトニ慣レシメザル可ラス則チ解説口授説問ノ際ニ於テモ實物標本ノ指示圖解比喻分解總合等種々ノ工夫ヲ用ヒ且ツ教員ノ言語ハ平易ニシテ正シカラシコトヲ主トシ兒童ヲシテ之ニ倣ハシメシコトヲ要ス

(註) 明治十九年十月五日靜岡縣布達、第五條

〔二二七八〕 小學試驗規則

第五章 教育の方法



第一章 定期試験一歳中分つて上下の二回とす

上期試験 三月四月 下期試験 九月十月

第二章 定期は必ず學務吏員毎中學區に派出し試験場に立會するを法とす

但時あつては長次官之に臨む(九年達入號に  
て但書取消)

第三章 中學區内便宜各所に試験場を設け各校生徒の内卒業假證書を  
持つる者を招集し同級の者二十名乃至三十名宛を一組とし試験教員之  
に接し其級其科の要を撮み試査して之を品評す

第四章 試験畢り其詳點する所の表に據りて成否優劣を判決し及第の  
者へは即日卒業證書を授與す

第五章 日常各校五校宛を一聯校とし卒業の生徒あれば其教員互に相  
交渉し嚴に内試験を遂げ卒業假證書を與へて其級を昇せ置くへし定  
期試験は假證書を持する者に非されば應試を許さす

第六章 試験時間は午前第九時より午後第四時に閉場するを法とす

第七章 試験教員は教員傳習所より派遣し補助を一中學區内に三名宛  
投票を以て選拔することとす

但教員傳習所に於て免許狀を得し者並準三等以上の教員に非され  
は其撰に當るの權利なきものとす

第八章 學區取締は分掌の校互に交渉二名宛並其區吏員一二名宛試験  
場に立會すへし此日生徒の父兄は勿論衆庶の縦覽を許すへし

第九章 應試諸科一の失無く及第甲科の者へは褒牌を與ふへし總て卒  
業證書を與へし者は其等差姓名年齢等學務課に於て上梓報告すへし

(註) 明治九年二月十日福岡縣布達

〔二二七九〕文部省第三年報  
第一冊

上校ノ點鐘ヲ鳴スヤ生徒皆五分時内ニ諸器具ヲ準備シ教場ニ上ル可シ

教員其席ニ臨ミ整頓整列ノ令ヲ下ス或ハ之ニ代フルニ一二ノ令ヲ以テ  
 ス即チ一ノ令ニテ生徒書器ヲ整頓シ二ノ令ニテ其坐次ヲ整ヘ教員ノ指  
 令ニ注意ス可シ、修課中教員ハ總生徒ヲシテ授業上ニ注意着目セシムト  
 雖自然位置ヲ擾亂シ或ハ左顧右眄手ヲ搖ス者アルトキハ其名又ハ番號  
 ヲ唱ヘテ注意拱手位置端正ナラシム可シ但シ諧算問答等ノ課ニ於テハ  
 必ス拱手シテ椅子ニ端坐セシム可シ、修課中總テ生徒ヲシテ同音一聲ニ  
 誦讀溫習セシムルコトアリ或ハ課題ヲ掲ケテ之ニ答ヘントスル者ハ一  
 同ニ右手ヲ舉サセ其中一生徒ヲ撰ヒ答辨ヲ命スレハ一同手ヲ下ス若シ  
 答辨ニ謬誤アレハ復他生ヲ指示シテ答辨セシム可シ但教場ハ肅靜ナル  
 ヲ要ス故ニ生徒一切ノ事必ス右手ヲ舉ケ教員ノ許可ヲ得テ後之ヲ行フ  
 可シ、放課ノ點鐘ニテ一ノ令下ラハ生徒手ヲ拱シテ椅子ニ端踞シ二ノ令  
 ニテ其儘右ノ生徒ハ右ニ向キ左ノ生徒ハ左ニ向ク三ノ令ニテ起立シ四  
 ノ令ニテ(左右)ニ轉回ス五ノ令ニテ一同坐次ヲ亂サス進行シテ教場ヲ

退カシム可シ但生徒教場ヲ退ケハ必ス窓戸ヲ開テ新鮮ノ空氣ヲ入ル可  
 シ、轉課ノ令ハ授業ノ前書籍石盤等ノ令下ラハ生徒一同書籍又ハ石盤等  
 ヲ机上ニ排列シ其課卒リテ復令下ラハ机中ニ納ム可シ蓋シ開閉ハ一次  
 ニシテ必ス靜ナル可シ、凡敬禮ス可キ人教場ニ入ルトキハ教員禮式一ノ  
 令ヲ下サハ生徒皆起立シ二ノ令ニテ頭ヲ少ク頷シ三ノ令ニテ復坐セシ  
 ム可シ

(註) 「新潟師範學校年報」中「教場指令式」

〔二二八〇〕文部省第三年報  
 第一冊

第一條教場出席ノ時限ニ後レタル者、教場ニ於テ書籍器械ヲ取亂ス者、正  
 課時間他席ヲ犯ス者、教場ニ在リテ私ニ談話スル者、教場ニ在リテ教員ノ  
 許可ヲ待タズ猥リニ言ヲ發スル者、右第一條ハ五分間ノ遊歩ヲ禁ス、第  
 二條給貨物ヲ粗暴ニ取扱フ者、校內ニ在リテ瓦石彈丸ノ類ヲ抛ツ者、右第

二條八十分間ノ遊歩ヲ禁ス 第三條喧嘩口論ヲ爲ス者右第三條八十五分間ノ遊歩ヲ禁ス 第四條給貨物品ヲ失ヒタル者右第四條ハ失品ノ定價ヲ當人ヨリ償還セシム且一時間教場ニ直立セシム 第五條怠惰不勉強ニシテ監事教員等ノ戒諭ヲ用キサル者、數度校則ヲ犯ス者右第五條ハ一時三十分教場ニ直立セシム若シ犯狀右第五條中ノ科目ニ當ラサルモノハ時々稟議ノ上相當處分可致事

(註)「筑摩縣年報」中「小學校罰則」の條

〔二二八〕文部省第三年報  
第一冊

第一條生徒入學ノ上ハ何事ニヨラス教員ノ指揮ニ從フヘキ事 第二條午前第九時上校午後第三時退校ノ事 第三條生徒毎朝上校ノ節必ス受持教員或ハ世話役ヘ名刺ヲ差出シ退校ノ節之ヲ帶歸スヘキ事 第四條上校ハ課業時限ニ後ルヘカラサル事 第五條上校ノ往返路遊等致ス可

カラサル事 第六條教員ハ勿論同輩ノ者ト雖トモ丁寧ニ禮讓ヲ行フ可キ事 第七條書籍並ニ筆墨紙等借貸致ス可カラサル事但不得止ノ節ハ其由ヲ教員ヘ可申出事 第八條書籍丁寧ニ取扱損失無之様致スヘシ且日用ノ物品ハ上校ノ節必携ヘ來リ決シテ失亡致ス可カラサル事 第九條教場ニテ喧嘩口論及ヒ雜談等致ス可カラサル事 第十條教場ニ生徒ノ等級並ニ名札ヲ掲ケ其座次ヲ示スヘキ事但シ毎月末ニ試験シ其優劣且平生ノ勤惰等ヲ評判シ其席順ヲ變換スヘキ事 第十一條教場ニテ奔走シ或ハ大聲ヲ發ス可カラサル事 第十二條教場ハ毎朝掃除シ清潔ニスヘキ事 第十三條教場ニ於テ襟卷並ニ肱合羽着用致ス可カラサル事 但控所ハ此限ニアラス 第十四條課業ノ時間ハ鐘又ハ木柝ヲ撃チ報告スヘキ事 第十五條課業中猥ニ席ヲ離ル可カラサル事 第十六條休息中教員ノ許可ナクシテ教場ヘ入ヘカラサル事 第十七條病氣等ニテ不參ノ節ハ上校時限前ニ其由ヲ届ケ出ヘキ事 第十八條生徒疥癬其他傳

染症ノ病アレハ上校ヲ止メ其癒ルヲ待テ上校致スヘキ事 第十九條校  
内ニテ都テ危キ遊ヲ爲シ及瓦石彈丸ノ類ヲ抛ツヲ禁スル事

(註)「筑摩縣年報」中「小學校則」

〔二二八二〕開化のはなし

方今、國として學校あらざる所なく、家として學ばざるの兒なし、然りと雖も、世の父母たるもの、動もすれば、我子を學校の教導に打ち任せ、家裡の訓戒を怠る、故に兒童の學校に入るもの、業を受るの間は、從順行狀によきやうなれども、家に歸れば、再生人の如く、父母の指令に忤ひて、惡遊戯をなし、遂に註違式に觸れて、巡查の棒を食ふ如き大事を仕出すものあり、嗚呼、人の父母たるもの、家裡の教を欠くときは、折角朝廷の御仁德、教師の盡力も、亦水上の泡沫ならん、

(註)「學校門前の教育論」の條

〔二二八三〕男女小供行儀仕附法

子供漸く年を重さねて六七歳となり小學校に通ふ頃ろになれば朝さ父母の起きると共に起こし目上の者の前に手をつきて「お早う御坐りまする」との挨拶をなさしめ朝飯の支度出来るまでは昨日學校にて教授を受けし學科の溫習をなさしむべし其の朝飯濟んで學校に行く時は父母の前に膝まつき以て「學校へいつて参ります」と云はしめ又其の歸りし時は「唯た今歸りました」と云はしむべし而して其學校に行く時は決して遊戯物を持ち行かざる様常に之を戒しめ學校より歸りし後ち今日教授を受けし所を溫習せしむべし其の溫習濟まば夕刻まで遊びの時間に與へ夜間に至て前々學びし書籍一冊と算術及び習字の幾分を溫習せしめ以て寢りに就かしむべし

(註)「小學校に通ふ頃ろの行儀仕附法」の一節

## 解 説

最近世の教育方法は、學校教育の發展と共に、從來の個別的な教育方法に對して學級教育法を發達せしめたことにその主たる特質を見ることが出来る。この方法が發達したのは、學校教育を國家が管理し、多くの人々を一學校に集めて教育を授けるに至つたこと、教育の内容が豊富な知識を多量に授けるにあつた爲である。かくの如き事情より成立することゝなつた學級教授法即ち一齊教育法は、東京師範學校に於いて小學教則を編成し、教育法の傳習を始めた頃に成立したのである。各地の師範學校に於いてはこの方法に基いた小學校教授法が傳習せられたのである。其際にこの方法を解説した教授本が出版せられ、方法の手引用書となつたのである〔三五九・三三六〇〕。その方法の著しい變化は、教師が鞭を持つて教授圖を指し、生徒が一名宛立つてそれを唱し、終つて全生徒がこれを唱和するといふ一齊教授法の形を成り立たせたのである〔三六一―三三六三〕。その爲には教便物を新に必要とするに至り、各教室には黒板が設けられ、教授圖、教科用書が整へられ、從來の家塾様式の室内とは全く異つた教室が出来上りつゝあつた〔二六四・二六五〕。この方法が未だ充分な普及を見ず、依然として素讀の様式を離れ得なかつたのも地方の小學校

には勿論あつたであらうが、教法の新しい形がとられなければならぬことは、學校の發達と共に、次第に明瞭になつて來たのである〔二六六〕。

然るに新しく口授問答の教育方法が、この學級教育法の傳習の際に成立し、これが近代學校に於ける教育法たる實物直觀教育法への途を拓いた。諸物の性質及び用法を授けることは、初歩の知識教育が要求してゐるものであるが、この諸物教授の方法は圖を用ひて教師が生徒と問答し、又はこれを口授するといふ形をとつた。この際出來得るならば、實物を用意して、これを授けるといふ教授法を要求する様になつてゐた。學科としても口授問答が成立し、この新しい教育方法に必要な課程を提供してゐた〔二六七―二七二〕。

斯くの如き新しい教育法の成立する際に、アメリカ合衆國を通じてベスタロッチイの實物教育法が移入されることゝなつた。この實物を直觀せしめて教育をなすといふ方法が、各科の教育を實物へ接近せしめたのであるが、それと共に、物理や化學に於ける實驗法をも認めることゝなつた。文字のみを教へんとしてゐた從來一般の教育方法に對して、實物やその觀察、實驗などによる教育が、如何に近代生活のため緊要であるかを知ることが出来たのである。當時開發教育といふ標語をもつて全國に知られるに至つた教育方法は、この近代學校に合致した方法に理論を與へ、その普及を速かならしめたものであつた〔二七二―二七七〕。

學校に於ける教育の効果をあげる目的を以つて、試験法が全国的に實施せられ、その結果によつて進級の決定がなされてゐた〔三二七八〕。又多數の生徒を一つの學校に收容することゝなつた爲に、規律を維持することが必要となり、學校生活に關する諸則が新に設けられ、進退動作を通しての訓練法もその様子を改めた〔三二七九—三二八二〕。

家庭に於いては、兒童の教育を全く學校へ委任し、家庭に於ける教育方法の如きも、學校に於いて授けられるものを、溫習してこれを補助するが如き有様となり、學校の教育方法が、家庭に於ける教育の方法をも定める事情となつた〔三二八二・三二八三〕。

## 第六章 教育方針の確立

〔三二八四〕 教學大旨

教學ノ要仁義忠孝ヲ明カニシテ知識才藝ヲ究メ以テ人道ヲ盡スハ我祖訓國典ノ大旨上下一般ノ教トスル所ナリ  
然ルニ輓近專ラ智識才藝ノミヲ尙トヒ文明開化ノ末ニ馳セ品行ヲ破リ風俗ヲ傷フ者少カラス然ル所以ノ者ハ維新ノ始首トシテ陋習ヲ破リ知識ヲ世界ニ廣ムルノ卓見ヲ以テ一時西洋ノ所長ヲ取り日新ノ効ヲ奏スト雖モ其流弊仁義忠孝ヲ後ニシ徒ニ洋風是競フニ於テハ將來ノ恐ル、所終ニ君臣父子ノ大義ヲ知ラサルニ至ランモ測ルヘカラス是我邦教學ノ本意ニ非サル也

自今以往祖宗ノ訓典ニ基キ專ラ仁義忠孝ヲ明カニシ道德ノ學ハ孔子ヲ

主トシテ人々誠實品行ヲ尙トヒ然ル上各科ノ學ハ其才器ニ隨テ益々長進シ道徳才藝本末全備シテ大中至正ノ教學天下ニ布滿セシメハ我邦獨立ノ精神ニ於テ宇内ニ恥ル事無カル可シ

(註) 明治十二年夏元田永孚記聖旨の一節

〔二二八五〕教育議附議

今聖上陛下君ト爲リ師ト爲ルノ御天職ニシテ内閣亦其人アリ此時ヲ置テ將タ何ノ時ヲ待タントス且國教ナル者亦新タニ建ルニ非ス祖訓ヲ敬承シテ之ヲ闡明スルニ在ルノミ其人民ノ信從スルト否サルトハ唯陛下ノ閣臣ト厚ク信シテ恒久撓マサルニアリ彼ノ佛法耶蘇教ノ妄鑿信スルニ足ラサルモ其死生禍福利害ノ人心ニ切當ナルヲ以テ人々迷信沈痼動スヘカラサルニ至ルヲ見レハ則國教ノ立ツト立タサルトハ我信スルノ厚キト厚カラサルトニ決スルノミ其人民ノ信否ハ政府ノ管制スヘキ所

ニ非サルハ原議ノ云所ノ如ク佛法ノ入ル已ニ久シク耶蘇教又之ヲ不問ニ置キ之ヲ禁止スヘカラサレハ則國教ヲ建明施行スル陛下ト閣臣トノ最確信篤行ニ出テサルヘカラサルナリ歐州ノ事臣之ヲ審カニセスト雖トモ其帝王宰相以下人民ニ至リ皆其宗教ニ基ツカサル者ハ無キナリ本朝瓊々杵尊以降欽明天皇以前ニ至リ其天祖ヲ敬スルノ誠心凝結シ加フルニ儒教ヲ以テシ祭政教學一致仁義忠孝上下二アラサルハ歷史上歴々證スヘキヲ見レハ今日ノ國教他ナシ亦其古ニ復セン而已

(註) 明治十二年九月元田永孚上奏文の一節

〔二二八六〕上卷 江木千之翁經歷談

小學校教則綱領案成るや、文部に於ては、之を發布するに先つて、彼の小學教員心得の如く、豫め之を天皇陛下の御内覽に供へ奉ることが宜しからんとの議に決し、即ち御手許へ差出したのである、自分は、此の教則綱領案

に就ても、彼の教員心得案に於けるが如く、我教育を皇道主義に引直さんとし、餘程苦心して作り上げたのであつて、前章にも述べたる通り、歴史を授けるにも、尊王愛國の志氣を振起するを主眼としなくてはならぬといふやうに規定し、乃ち道德教育の方針は、此の教則綱領に依て一變せらるゝことにならんと思考し、聊か得意であつたのである、然る處、陛下には仔細に之を御閱覽遊ばされたる末、徳大寺侍從長に向はせられ、此の教則綱領案起草の主任官を差出すやうにと云ふ御沙汰があらせられたのであつた。そこで、自分は文部卿の命に依り宮中侍從長室へ伺ふと、表御座所に出御遊ばされたる陛下には、侍從長を以て種々御下問在らせられ、歴史科の處に至ると、侍從長より左の御内意を傳へられたのである、即

「此教則綱領は、大體に於て餘程良く出来て居ると思召さるゝ、たゞ歴史科の所を御覽遊ばさるゝと、神武天皇の東征、南北朝の亂、保元平治の役、前九年後三年の役、源平の亂、維新の役等、戦争の事が多く掲げてある、從

來我國の歴史の書は、戦争の事を以て充たされて居るものが多いのであるが、去りながら、兒童の教授上に於て、斯の如く戦争の話に繼ぐに戦争の話をしてする時は、或は後世臣民の子孫をして、亂を思はしむるの虞がありはせぬか、何とか、今少し良い考はないものか、例へば、古の王政の時代には、随分治績の見るべきものもあつたやうである、又建國の體制なども、心得て置かしむるやうにしては如何であるか、其等の事をも、考合せてはどうか、

恐多くも右様の仰せであるといふことであつた、此日は、丁度日曜日であつたにも拘らず、陛下は御座所に出御遊ばされ、徳大寺侍從長も出勤致して居られたのであつた、平日は日常の御政務にて御多忙に在らせられるゝから、特に日曜日に於て篤と御下問在らせられたることかと拜察致さるゝのであつた、當日は教則綱領案の修身の科より始め、種々御尋があつたのである、侍從長は、御座所と自分が控へて居る侍從長室との間を十數





メンコトヲ務ムヘシ

一 智心教育ノ目的ハ專ラ人々ヲシテ智識ヲ廣メ才能ヲ長シ以テ其本文ヲ盡スニ適當ナラシムルニ在リ豈徒ニ聲名ヲ博取シ奇功ヲ貪求セシメンカ爲メナランヤ故ニ教員タル者ハ宜ク此旨ヲ體認シ以テ生徒智心上ノ教育ニ從事スヘシ

一 身體教育ハ獨リ體操ノミニ依著スヘカラス宜ク常ニ校舎ヲ清潔ニシ光線溫度ノ適宜及大氣ノ流通ニ留意シ又生徒ノ健康ヲ害スヘキ癖習ニ汚染スル等ヲ豫防シ以テ之ニ從事スヘシ

一 鄙吝ノ心志陋劣ノ思想ノ懷クヘカラサルハ人々皆然リト雖モ特ニ教員タル者ハ自己ノ心上ニ於テ最モ謹テ之ヲ除去セサルヘカラス蓋シ幼童ノ智徳ヲ養成シ身體ヲ發育スルノ重任ニ膺リ以テ世ノ福祉ヲ増進スルノ實効ヲ奏スルハ固ヨリ鄙吝陋劣ニシテ偷安貪利ヲ事トスル徒ノ敢テ能クスヘキ所ニアラサレハナリ

一 學校管理上ニ缺クヘカラサル快活ノ氣象ハ心神萎靡セル人ノ能ク具有スヘキ所ニアラス又生徒教授上ニ缺クヘカラサル許多ノ勞力ハ身體孱弱ナル者ノ能ク寧耐スヘキ所ニアラス是故ニ教員タル者ハ宜ク特ニ起居飲食等ノ常度ヲ守リ散躰及運動等ノ良規ニ循テ其心身ノ健康ヲ保全シ以テ其職務ヲ盡スノ地ヲ做サンコトヲ務ムヘシ

一 教員タル者ハ唯小學校教則中ニ掲クル所ノ學科ニ通スルノミヲ以テ足レリトセス博ク教則外ノ學科ニ涉ランコトヲ要ス苟モ此ノ如クナラサレハ條子教授上ニ破綻ヲ生シテ生徒ノ信憑ヲ失ヒ遂ニ其身ヲ學校ノ上ニ置ク能ハサルニ至ルヤ必セリ

一 教員タル者ハ常ニ整然タル秩序ニ由リ學識ヲ廣メ以テ其心志ヲ練磨センコトヲ務ムヘシ否ラサレハ決シテ教授ノ實効ヲ奏スル根柢ヲ立ツル能ハス蓋シ我カ練磨セサルノ心志ヲ以テ能ク他人ノ心志ヲ練磨シ得ルモノハ未タ曾テ之アラサルナリ

一 師範學校等ニ於テ嘗テ學習セシ所ノ教育法ハ概ネ其一樣子タルニ過キサルモノナリ故ニ教員タル者ハ徒ニ之ヲ踏襲スルヲ以テ足レリトセス宜ク常ニ自ラ其得失利病ヲ考究取捨シ以テ之ヲ活用センコトヲ務ムヘシ

一人ノ心神及身體ノ組織作用ニ至テハ教員タル者最モ深ク意ヲ留メ講究ト經驗トニ由テ其原理實際ニ精通センコトヲ要スヘシ否ラサレハ假令孜々汲々トシテ教育ニ從事スルモ遂ニ臆度妄作ノ弊ヲ免ル、コト能ハサルナリ

一 學校管理ノ事ハ之ヲ教授ノ事業ニ比スレハ更ニ困難ナリトス故ニ教員タルモノハ常ニ人情世態ヲ審ニシ通義公道ヲ辨シ且事ヲ處スルノ方法務ヲ理スルノ順序等ヲ諳練セサルヘカラス

一 校則ハ校内ノ秩序ヲ整肅ナラシムルニ止ラス兼テ生徒ノ德誼ヲ勸誘スルノ要具タリ故ニ教員タル者ハ能ク此旨趣ヲ體認シ以テ之ヲ執行

セサルヘカラス

一 熟練懇切黽勉ノ三者ハ亦教育上ニ缺クヘカラサルノ美事タリ故ニ教員タル者能ク此三者ヲ具備シテ其事ニ從フトキハ獨リ教授ノ實効ヲ奏スルヲ得ヘキノミナラス又生徒ヲシテ不知不識此等ノ美事ニ感化シ習慣自然ノ如クナラシムルニ至ルヘシ

一 學校ヲ統率スルハ殊ニ剛毅、忍耐、威重、懇誠、勉勵等ノ諸德ニ由ルヘシ蓋シ剛毅ニアラサレハ難ニ勝ル能ハス忍耐ニアラサレハ久ヲ持スル能ハス威重ニアラサレハ人ヲ服スル能ハス懇誠ニアラサレハ衆ヲ懷ル能ハス勉勵ニアラサレハ事ヲ成ス能ハス

一 生徒若シ黨派ヲ生シ爭論ヲ發スル等ノ事アラハ之ヲ處置スル極メテ穩當詳密ニシテ偏頗ノ弊ナク苛刻ノ失ナカランヲ要ス故ニ教員タル者ハ常ニ寬厚ノ量ヲ養ヒ中正ノ見ヲ持シ就中政治及宗教上ニ涉リ執拗矯激ノ言論ヲナス等ノコトアルヘカラス

一人トシテ善良ノ性行ヲ有スヘキハ言フ俟タスト雖モ教員タル者ニ至テハ最モ善良ノ性行ヲ有セサルヘカラス否ラサルトキハ獨リ幼童ノ徳性ヲ涵養シ善行ヲ誘掖スルコト能ハサルノミナラス却テ其天賦ヲ戕賊スルニ至ルヘシ蓋シ幼童ノ中心タル至虛至冲ニシテ外物ノ爲ニ感染セラル、コト極メテ鋭敏ナレハナリ

一教員タル者ノ品行ヲ尙クシ學識ヲ廣メ經驗ヲ積ムヘキハ亦其職業ニ對シテ盡スヘキノ務ト謂フヘシ蓋シ品行ヲ尙クスルハ其職業ノ品位ヲ貴クスル所以ニシテ學識ヲ廣メ經驗ヲ積ムハ其職業ノ光澤ヲ増ス所以ナリ

(註) 明治十四年六月第十九號別冊「小學校教員心得」の全文

〔二二八八〕法規分類大全  
學政門一

彝倫道德ハ教育ノ主本我朝支那ノ專ラ崇尚スル所歐米各國モ亦修身ノ

學アリト雖モ之ヲ本朝ニ採用スル未タ其要ヲ得ス方今學科多端本末ヲ誤ル者亦鮮カラス年少就學最モ當ニ忠孝ヲ本トシ仁義ヲ先ニスヘシ因テ儒臣ニ命シテ此書ヲ編纂シ群下ニ頒賜シ明倫修徳ノ要茲ニ在ル事ヲ知ラシム

(註) 明治十五年十二月幼學綱要頒賜ノ勅諭

〔二二八九〕學制規則ニ關スル御内旨

二月廿一日侍講元田永孚御内旨ヲ奉シ、文部卿福岡孝悌拜承ス  
今回文部省學制諸般ノ規則ヲ熟覽セシニ、初メ朕カ前任文部卿寺島宗則ニ諭シタル以來ノ趣意達セシ者ト看ル故ニ、其教則ニ於テモ、總テ朕カ異存ヲ措ク所ナシ、因テ此旨ヲ速ニ現任文部卿ニ傳ヘヨ、且次ノ條件ヲ諭セヨ、

一此學制規則ヲ以テ、文部卿ニ於テ充分ニ實際ノ施行ヲ遂クルヲ要トス

ベシ之ヲシテ徒法ニ歸セシムルコト勿レ、  
 一教育ノ事ハ固ヨリ一時ニ遂クヘキモノニ非ス、假令現任文部卿ヲ替ル  
 トモ、文部省ニ於テハ此ノ旨趣ヲ一貫シ、徹底セシムヘキノ覺悟アルヘ  
 シ

一從來歐米ニ偏セシ學風ハ、亡慮之ヲ洗除シ、小學歴史科ニ於テハ、我國史  
 ノ外、漢洋共ニ用ヒサルカ如キ、尤其宜シキヲ得タリトス、然トモ、爾後或  
 ハ風潮ニ逐ハレ更ニ獨逸ニ倣フヘク、又ハ露國ニ取ルヘキ等ノ論アル  
 モ、文部省一定ノ制規ニ據リテ、變動セス、十年ノ後其成功ヲ奏スヘシ、不  
 得已シテ更ニ各國ニ取ルヘキ等ノコトアラハ、文部卿能ク其意見ヲ盡  
 シ、精擇シテ其取ルヘキモノヲ取り、彼ニ偏スルコト勿レ、

(註) 明治十五年二月二十一日

〔三九〇〕 聖諭記

十一月五日午前十時例ニ依リ參内既ニシテ皇上、出御直ニ臣ヲ召ス臣進  
 テ御前ニ侍ス皇上親諭シテ曰ク朕過日大學ニ臨ス十月廿九日設ル所ノ學科ヲ  
 巡視スルニ理科(化學)科植物科醫科法科等ハ益々其進歩ヲ見ル可シト雖  
 モ主本トスル所ノ修身ノ學科ニ於テハ曾テ見ル所無シ和漢ノ學科ハ修  
 身ヲ專ラトシ古典講習科アリト聞クト雖トモ如何ナル所ニ設ケアルヤ  
 過日觀ルコト無シ抑大學ハ日本教育高等ノ學校ニシテ高等ノ人材ヲ成  
 就スヘキ所ナリ然ルニ今ノ學科ニシテ政治治安ノ道ヲ講習シ得ヘキ人  
 材ヲ求メント欲スルモ決シテ得ヘカラス假令理化醫科等ノ卒業ニテ其  
 人物ヲ成シタルトモ入テ相トナル可キ者ニ非ス當世復古ノ功臣内閣ニ  
 入テ政ヲ執ルト雖トモ永久ヲ保スヘカラス之ニ繼クノ相材ヲ育成セサ  
 ル可カラス然ルニ今大學ノ教科和漢修身ノ科有ルヤ無キヤモ知ラス國  
 學漢儒固陋ナル者アリト雖トモ其固陋ナルハ其人ノ過チナリ其道ノ本  
 體ニ於テハ固ヨリ之ヲ皇張セサル可カラス故ニ朕今德大寺侍從長ニ命

シテ渡邊總長ニ問ハシメント欲ス渡邊亦如何ナル考慮ナルヤ森文部大臣ハ師範學校ノ改正ヨリシテ三年ヲ待テ地方ノ教育ヲ改良シ大ニ面目ヲ改メント云テ自ラ信スルト雖トモ中學ハ稍改マルモ大學今見ル所ノ如クナレハ此中ヨリ眞成ノ人物ヲ育成スルハ決シテ得難キナリ汝見ル所如何臣謹テ對テ曰ク陛下ノ言此ニ至ル皇國生民ノ幸ナリ臣曩ニ命ヲ奉シテ德大寺ト共ニ大學ヲ巡視シ<sup>十八日</sup>夙ニ感覺スル所アリ德大寺先ニ既ニ反命スルヲ以テ臣未タ敢テ陳セス謂ラク臣敢テ言ハスト雖トモ陛下一タヒ臨御セハ必ス叡心ニ覺ル所アラント今宸勅ヲ奉スルニ果シテ臣カ見ル所ノ如シ臣嘗テ大學學科ノ設ケヲ聞クニ修身ノ學科ナシ和漢ノ學ハ文學科ニ和漢文アリト雖トモ僅カニ和漢ノ文章ヲ作ルノミ哲學科ニ東洋哲學アリト雖トモ是亦僅カニ經書聖賢ノ話ヲ述ルノミ加之僅カノ時限ヲ以テ勿々ニ經過スレハ和漢修身ノ學ハ僅カニ名ノミニシテ其勢將ニ廢棄セラレントス其教科ニアル教官ハ物集高見島田重禮等僅

々タル一二員ニシテ其餘ハ皆洋學專修ノ徒而シテ此人々タルヤ大抵明治五年以來ノ教育ニ成立シタル者ニシテ西洋ノ外面ヲ摹仿シ曾テ國體君臣ノ大義仁義道德ノ要ヲ聞知セサル者共ナリ彼ノ某等ノ著書ヲ一見シテモ其ノ放言スル所ニ依テ其思想ノ赴ク所ヲ概見スヘシ此等ノ腦髓ヲ以テ生徒ヲ教導セハ後來ノ害實ニ恐ル可キナリ今ニシテ此ヲ停止セサレハ復挽回スヘカラス今陛下ノ直衷ヨリ發シ德大寺ヲ遣ハサレ渡邊總長ニ詰問ヲ賜ハラハ皇道ノ興張果シテ此ヨリ生ルヘキ也臣誠恐深ク陛下ノ此言ニ感仰欽敬ス臣敢テ一身ヲ顧ミス唯陛下ノ命スル所森大臣渡邊總長ニ向テ問難スル所アラント然トモ臣竊ニ自ラ量ルニ臣カ漢學者流ニシテ陛下ノ左右ニアルハ衆目ノ視ル所ナリ故ニ臣カ言ヲ出サハ陛下眞衷ノ勅語モ故ハ臣カ上言シテ作爲スル所ト疑ヲ容レンモ知ルヘカラス是臣カ謹ンテ敢テ自ラ任せサル所ナリ抑教育ノ重大ナル夙ニ陛下ノ深く慮ル所幼學綱要ノ欽定アリシヨリ漸クニシテ米國教育ノ流

弊ヲ救正シ世上再タヒ忠君愛國ノ主義ニ赴キ仁義道德ヲ唱フル者アルニ至リシモ去々年ヨリ又復洋風ニ傾キ昨今ニ至テハ專ラ洋學ト變シ和漢ノ學ハ將ニ廢絶ニ至ラントスルノ勢有志ノ士皆大ニ憂慮スル所ナリ但國學漢學ノ固陋ナルハ從來教育ノ宜キヲ得サルニ因ル其忠孝道德ノ主本ニ於テハ和漢ノ固有ナリ今西洋教育ノ方法ニ由テ其課程ヲ設ケ東洋哲學中ニ道德ノ精微ヲ窮ルニ至ルノ學科ヲ置キ忠孝廉恥ノ近キヨリ進ンテ經國安民ノ遠大ヲ知得スルコトヲ務メタランコト眞ノ日本帝國ノ大學ト稱スヘキナリ今ノ設ケノ如クシテハ聖諭ノ如ク名醫ハ多人數成就ナルモ政事ハ執ルコトハナルマシク法學ニテ君德ノ補佐モ充分ナラス理化植物工科等ニテ其藝ニ達シタリトモ君臣ノ道モ國體ノ重キ腦髓ニ之無キ人物日本國中ニ充滿シテモ此ヲ以テ日本帝國大學ノ教育トハ云ヘカラサルナリ自今以往聖諭ニ因テ和漢修身ノ學科ヲ更張センニハ其道ニ志アル物集島田等ノ如キ聊カモ國學ニ僻セス漢學ニ泥マス西

洋ノ方法ニ因テ教科ヲ設ケ時世ニ適應シテ忠孝道德ノ進歩ヲ生徒ニ教導センコト何ノ難キコトカアラン其風氣ノ及フ所必ス國學漢學者中ニ奮發シテ國用ニ供スル者出來ルヘキ也當世ノ風潮ハ面々各々其辯ヲ震ヒ其腕ヲ伸ハシ唯進ンテ取ルコトヲ要スルノ時ニ際シテハ自分一步モ退クヘカラス素ヨリ彼等ニ抵抗スルニモ及ハス唯地步ヲ占メテ進ム時ハ一步モ拔カサス吾道德仁義ヲ進入セシムルヲ以テ當世ノ著眼トナスヘキナリ是臣カ平生ノ見ル所深ク陛下ノ勅諭ヲ敬承贊美シ速ニ德大寺ニ命セラレテ渡邊總長ニ下問アランコトヲ希フ所ナリ更ニ宜シク伊藤大臣吉井次官等ニモ聖意ノ在ル所ヲ御示諭アランコトヲ欲ス右謹ンテ上言スル處聖顏喜色麗シク更ニ又反復懇諭アリ一時間餘ニシテ退ク

(註) 明治十九年十一月五日元田永孚記

〔二二九一〕 建言稿  
下冊

事緩なるが如くにして甚だ急なる者あり、國民の德育是なり、従前智徳體の三育を擧げて、悉く文部省に委任ありしも、今に至りて是を見れば、智體の二育は頗る其效あれども、德育は其效甚少きが如し、蓋し従前文部長官の交迭頻繁なると、長官の代る毎に其主義に少しく變化あるに由れる者なるべし、今日以後外國との交際益々密なるの時に及び、國民の道德堅固ならざる時は、皇室の尊嚴を保ち、國家の安全を護すること能はざるの恐あり、謹て本邦の歴史を按するに、國民道德の根元は、常に皇室にあり、故に今日に當りて國民の道德を維持せんとするには、皇室を措て他に之を求むべき所なきを信ずるなり、仰き願くば今日斷然と大詔を發せられ、國民の道德教育は、皇室に於て全く其基礎を定められ、其施行の方法は、他の智體二育と共に之を文部省に委任せらるゝときは、國民の道德に於て、今日より必ず大に觀るべき者あるべし、

右彌御治定に相成るときは、之を奉行するの官なかるべからず、依て左に

一院を創置せられんことを望む、

一明倫院 宮内省中に之を置く

學士 五人以上十人以下

貴衆兩院の議員を兼ねることを得ず

屬 二人程

學士は學識徳望ありて、年齢五十以上の者を以て之に任ず、身分は勅任にして終身官たるべし、

俸給は、兼勤ならば年俸三百圓位、專勤ならば年俸八百圓位にて足るべし、學士の職掌は

第一、聖旨を奉じて本邦道德の基礎を論定し、又之を實際に施すの方法を考究す、

第二、全國大、中、小學校に用ゆる所の德育の教科書を檢定す、

第三、時々府下官公私の學校を巡視して、其德育の方法の可否を視察す、



第四、一年に二回程、府縣の學校を巡回して、其德育の方法を視察す、  
 第五、此後四五年を期して、全國諸學校に用ふべき德育の教科書を撰著す、  
 又學士は一月に一回程、御前に召させられて、道德上の談話を聞召されん  
 ことを願ふ、

(註) 明治二十二年土方宮内大臣へ提出したる西村茂樹の明倫院建設建言書

〔二二九二〕東京日日新聞  
 第五千五百五號

各官が目下社會の有様を嘆きて道德地に陥りたりと認むるは余も亦憂  
 慮する所なりと雖も之を挽回するの手段は古今の共に難ざる所なるは  
 亦各官の諒知せらるゝ所なるべし、余の思ふ所に據れば我が國建國以來  
 頼り來りたる教は我が民の心裏に入り易きを以て所謂人倫五常の道即  
 ち孔孟の教は我が民の德育に適すべし、故に此基礎に依り以て一部の好  
 書を編纂せんことを企望せり、何れの國の宗教にせよ是非善惡の意味に

於ては異なることなしと雖も自國傳來の教を避けて更に他に求むべき  
 の要なければなり、

(註) 明治二十三年三月四日榎本文部大臣が地方長官に對する回答記事の一節

〔二二九三〕教育勅語御下賜事情

余は去る明治二十三年五月から、翌二十四年の六月まで、一ケ年間文部大  
 臣を奉職したのであつたが、二十三年の五月、當時内務次官であつた余は  
 新たに大臣の榮任を拜せんが爲に參内したれば、任文部大臣の大命が下  
 ると、それに引續いて、教育上の基礎となるべき「箴言」を編めよといふ、極め  
 て重要な御沙汰が下つた、尙ほ此事に就いては、宜しく總理大臣と協議  
 して、其宜を失ふ勿れと云ふ旨を諭させられたのである、此の時には教育  
 勅語と云ふ稱謂は無く、教育上の箴言と仰せられたのであり、又當時の總  
 理大臣は今の山縣公爵であつて、拜命の即坐に於て、斯様な至重至大の御

沙汰を承るに就きては、今上陛下が、平生如何ばかり教育上に御軫念あそばされしかを恐察し奉り恐懼措く所を知らなかつたが、成敗は兎に角、心身の全力を竭して詔命に答奉するのは、臣民たるもの、本分であるからして、謹んで御請し、列席せられた山縣總理大臣と共に、内閣へ下つたのであつた、略○中

扱て余は斯の大命を拜して、夙夜我が國道德の根原如何、我が國教育の由來如何と云ふ二大問題に思考を凝らしたる末、遂に草案を起こして之を陛下に奉り、又屢々參内天顔に咫尺して、御示指を仰ぎ奉つたのであつて、余は國務尙書として、聊か獻替するの光榮を有したのである、尤其起草に付いて主として相談相手としたのは、當時法制局長官たりし故井上毅子で、同子は從來此方面には、大に注意して居り随つて餘程意見を有つてをたつたのである、而して當時、斯の箴言を編むに就いては、仁義忠孝を以て本とするといふに就き、隨分有力知名の士の反對もあつた、勿論余は余自身

の一家言を立てるのではないからして、成るべく自己の偏見を去つて、況く他人の意見を採用しようと思つて居つたが、唯だ確乎たる一の大信念があつた、それは道の本體は唯一にして古今内外の差別無く、唯時代の趨勢に適應せんが爲に、其形式を殊にするのみ、といふのであつて、何人の意見たりとも、此の反對思想には、斷乎として反抗したのである、略○中  
さて教育勅語御下賜以前に於ては、海内の民心は四分五裂して、亂麻の如くに紛亂して居つたからして、勅語渙發の後之に對し奉り、世論は如何なる狀況に至るべき乎と大に掛念したが、大詔一下するや、天下靡然として服従し奉り、民心のこれに向ふこと、恰も大旱の雲霓を求むるの概があつた、そこで余は其後參内して、

陛下御登極以來、屢々重要な詔勅を發して、民心の宜しく歸向すべき所を示させ給ひしより、國史未曾有なる維新の大業を完成し給ひ、國運益々隆昌に進み、臣民の慶福愈々加はり、天下聖德を仰ぎ奉らざるもの無

し、然れども此大詔命の如く、道德の大本立ち、教育の標準定まり、民心を安からしめたるは稀なり  
といふ旨を伏奏したれば、龍顔いと麗はしく嘉納し給ひし、と記憶してをるのである。

(註) 明治四十五年芳川顯正記拔奉

〔二二九四〕 教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ  
我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此  
レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ  
兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ  
修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開  
キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無

窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス  
又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン  
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所  
之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々  
服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

〔二二九五〕 法令全書 明治二十三年上卷

謹テ惟フニ我カ天皇陛下深ク臣民ノ教育ニ軫念シタマヒ茲ニ忝ク勅語  
ヲ下タシタマフ顯正職ヲ文部ニ奉シ躬重任ヲ荷ヒ日夕省思シテ嚮フ所  
ヲ愆ランコトヲ恐ル今勅語ヲ奉承シテ感奮措ク能ハス謹テ勅語ノ謄本  
ヲ作り普ク之ヲ全國ノ學校ニ頒ツ凡ソ教育ノ職ニ在ル者須ク常ニ聖意

ヲ奉體シテ研磨薰陶ノ務ヲ怠ラサルヘク殊ニ學校ノ式日及其他便宜日時ヲ定メ生徒ヲ會集シテ勅語ヲ奉讀シ且意ヲ加ヘテ諄々誨告シ生徒ヲシテ夙夜ニ佩服スル所アラシムヘシ

(註) 明治二十三年十月三十一日教育ニ關スル勅語奉體ノ訓令

〔二二九六〕 元田永孚書簡

書啓愈々御清榮奉恭賀候然者今般教育之勅諭御發布時會に被爲投誠に千載難遇之大幸抃舞欣躍之至に不堪爲國家生民奉祝上候右に付而は初めより素定之御卓識と以御誠意御養襄被成終に結果を被奏候段愚老之喋々を雖不待回顧すれは維新以來教育之主旨定まらず國民之方向殆んと支離滅裂に至らんとするも幸に聖天子叡旨之在る所と諸君子保護之力とを以て扶植匡正今日に至りたるも未だ確定之明示あらざるより方針に迷ふ者尠なからず然るに今般之勅諭に而教育之大旨即ち國民之主

眼を揭示せられ之を古今に通し而謬らす之を中外に施し而悖らす實に天下萬世無窮之皇極と云へし彼の不磨憲法之如きも時世に因而者修正を加へざるを得ざるも此の大旨に於而は亘於萬世而不可復易一字矣此勅諭にし而閣下責任之日に於て發せられたるは何等之慶なるや愚老竊に謂閣下勳功少なからずといへとも此の勅諭之贊成を以山縣總理大臣文武之大功也と感佩欽仰之餘眞衷を吐露すること如此閣下幸に一笑に付する事莫れ

(註) 明治二十三年十一月三日山縣有朋宛書簡

〔二二九七〕 山縣有朋書簡

朶雲拜誦愈御榮健奉抃賀候陳ハ今般教育之勅語御發布相成候儀實ニ國家ニ大幸御同慶之至ニ奉存候就而ハ小生御誠意ヲ贊襄仕り候トノ御稱賛有之候へ共敢而當ル所ニ非ス右ハ聖天子叡旨之在ル所ト平素貴臺之

御啓沃其力ヲ被爲盡候トニ由ル儀ト感歎仕候先ハ貴答旁微意ヲ陳シ候

(註) 明治二十三年十一月五日元田永孚宛書簡

〔二二九八〕 徳教ニ關スル勅諭ノ議

勅諭ヲ發表セラル、ニ於テハ本大臣聖意ヲ奉體シ務メテ徳教ヲ普及擴張セシムルノ方法ヲ設クルヲ任トス故ニ一方ニ於テハ教科書ノ卷首ニ辯スルニ勅諭ヲ以テシ臣民ノ子弟ヲシテ日課ヲ始ムルコトニ之ヲ拜誦セシメ自然聖意ノ在ル所ヲ腦裏ニ感銘シ以テ徳教ニ風化セシメントス又他ノ一方ニ於テハ者徳碩學ノ士ヲ選ヒ勅諭衍義ヲ著述發行セシメ本大臣之ヲ檢定シテ教科書トナシ倫理修身ノ正課ニ充テントス

(註) 明治二十三年九月下旬芳川文部大臣提出議案の一節

〔二二九九〕 教育報知 第二百九十七號

抑、余ガ著ハス所ノ勅諭衍義ハ實踐的倫理ヲ主トスルモノニテ、遍ク哲學諸派ノ各主義ヲ斟酌シ、併セテ東洋古來ノ宗教、倫理、風俗等ヲ參照シ、百度注意ヲ加ヘテ著ハス所ニテ、草稿ヲ變更スルコト、凡ソ八九回ニ及ブ、草稿略ボ成ルニ及ンデ加藤弘之、中村正直、井上毅等知己ノ人十有餘人ニ就テ其意見ヲ叩キ、文辭ノ如キハ、島田重禮、南摩綱紀、小中村清矩諸氏ニ質シ、力ヲ極メテ其完全ヲ期シタリ、

〔註〕 明治二十五年一月號「遂志生ニ答フ」の一節

〔二三〇〇〕 法令全書 明治二十四年上卷

修身ハ教育ニ關スル勅諭ノ旨趣ニ基キ兒童ノ良心ヲ啓培シテ其德性ヲ涵養シ人道實踐ノ方法ヲ授クルヲ以テ要旨トス

(註) 明治二十四年十一月文部省令第十一號、「小學校教則大綱」中修身の條の一節

## 解説

國家の教育制度が整へられ、近代的な學校教育が發展するに際して、國民教育の方針を確立する事業が現はれてゐる。我々はその發端を明治十二年夏に於ける明治天皇の教學に關する聖旨に於て拜することが出来るのである。この聖旨は教學大旨といふ文書になつて殘されてゐるが、これは明治天皇が明治十一年地方を御巡幸になつた際、親しく各地の民情を御覽遊ばされ、特に國民教育の根本方針に就いて御示しになつた聖旨である。この大旨にあつては知識才藝のみに走つた一般の教育の風潮を御指摘になり、教學の要は仁義忠孝を基とすべきであることを御諭しになつたのである。然かもその教を祖訓國典のうちにお求めになつて居られるのであつて、祖宗の訓典に基いた教を闡明し、國民教育の基本方針を確立遊ばされる御内意であらせられた〔二二八四〕。この御内旨を奉體した侍講元田永宇は、文書を奉つて、國教闡明に就いての兼ねてからの教育思想を述べて居る〔二二八五〕。これから後の教育方針確立のための御事業は、文部卿に御内旨が下されると共に、文部省内に於ける教育革新の仕事となつて發展してゐる。この革新の仕事は各方面に現はれてゐるが、そのうち著しいことは、東洋道德に基いた小學校修身書の編纂をなして、徳

育の方向を明示したことであり、更にこの内容の改善を全般の學科に推し弘めた小學校教則綱領の公布であつた。この教則綱領が成立するにあつては、豫め明治天皇の御内意を伺ひ奉つてゐる。その際に國史の内容に就いて、國民教育の方針から御批判があつたことが傳へられてゐる〔二二八六〕。又小學校教員に對して小學校教員心得が作られ、教育の方針を普通教育の分野から革新する仕事の一つとなつてゐる〔二二八七〕。これ等は文部省を通じての教育方針確立の仕事であつたが、それとは別に元田侍講に御命じになつて、幼童のための教訓書を編纂せしめられた。これが明治十五年十二月に御頒賜になつた『幼學綱要』であつて、それが明倫修徳の要を知らしめ、普通教育の基本たらしめんと遊ばされる御趣旨からのものであることは、頒賜の際の勅諭によく示されてゐる〔二二八八〕。斯くの如く國民教育方針確立の御内旨が着々として實現されるに至つたので、明治十五年二月二十一日文部省に於ける教育方針の革新を御嘉納になる御内旨が、文部卿に下されてゐる〔二二八九〕。そこには將來の文部省に於ける教育方針に就いてまで述べられてゐる。然るに明治十五六年後の教育界は、歐化主義の影響を受けて、國民教育方針の如きは、世人の注目を受け難くなつてゐた。かゝる事情に對し、徳育を中心とした教育方針を再び闡明しなければならぬと言ふ意向を持つものもあつた。例へば元田侍講が書き残してゐる聖諭記の如き、或は西村茂樹が宮内大臣に獻言した明倫院建設案の如きは、それを示してゐるものである〔二二九〇〕。

二二九二。かゝる間に當時教育界を賑はしてゐたのは德育問題であつた。德育の基本方針に關する論議の結果は、地方長官會議に於ける德育方針確立の建議となつた。文部大臣榎本武揚はこれに對して、地方長官に自からの意見を發表したが、問題はそれで片付かなかつたのである(二二九二)。これは閣議の議題となり、終に明治天皇の御内旨によつて、徳教に關する箴言を編纂することゝなつた。總理大臣山縣有朋、文部大臣芳川顯正の下に於いて法制局長官井上毅、樞密顧問官元田永孚等の協力によつてその草案が整へられ、教育に關する勅語として明治二十三年十月三十日御下賜になつた。こゝに於て兼ねてからの國民教育方針を確立遊ばされる御内意が、國民の前に勅語として示されるに至つた(二二九三・二二九四)。文部大臣は先づ勅語謄本を作製して全國の諸學校に頒ち、聖旨を奉體したのである(二二九五)。草案の起草に關係した元田永孚や山縣有朋の奉體の態度は、當時の書簡によく現はれてゐるが、國民等しく今更ながら聖旨の廣大なるを拜承し、國民教育の方針がこゝに確立されたことを難有く感じたのである(二二九六・二二九七)。文部大臣は兼ねてから勅諭奉體の方法に就いて考慮し、勅語を教科書に掲げて奉體せしむることゝ、勅語衍義書を編纂することを發議してゐた(二二九八)。それに従つて衍義書は井上百次郎が編纂し、これを教科書として檢定した(二二九九)。又小學校教則大綱を公にし、修身は勅語の趣旨によることゝしたが、唯に修身教育のみではなく、國民教育方針がこゝに於いて確立されたのである(三三〇〇)。

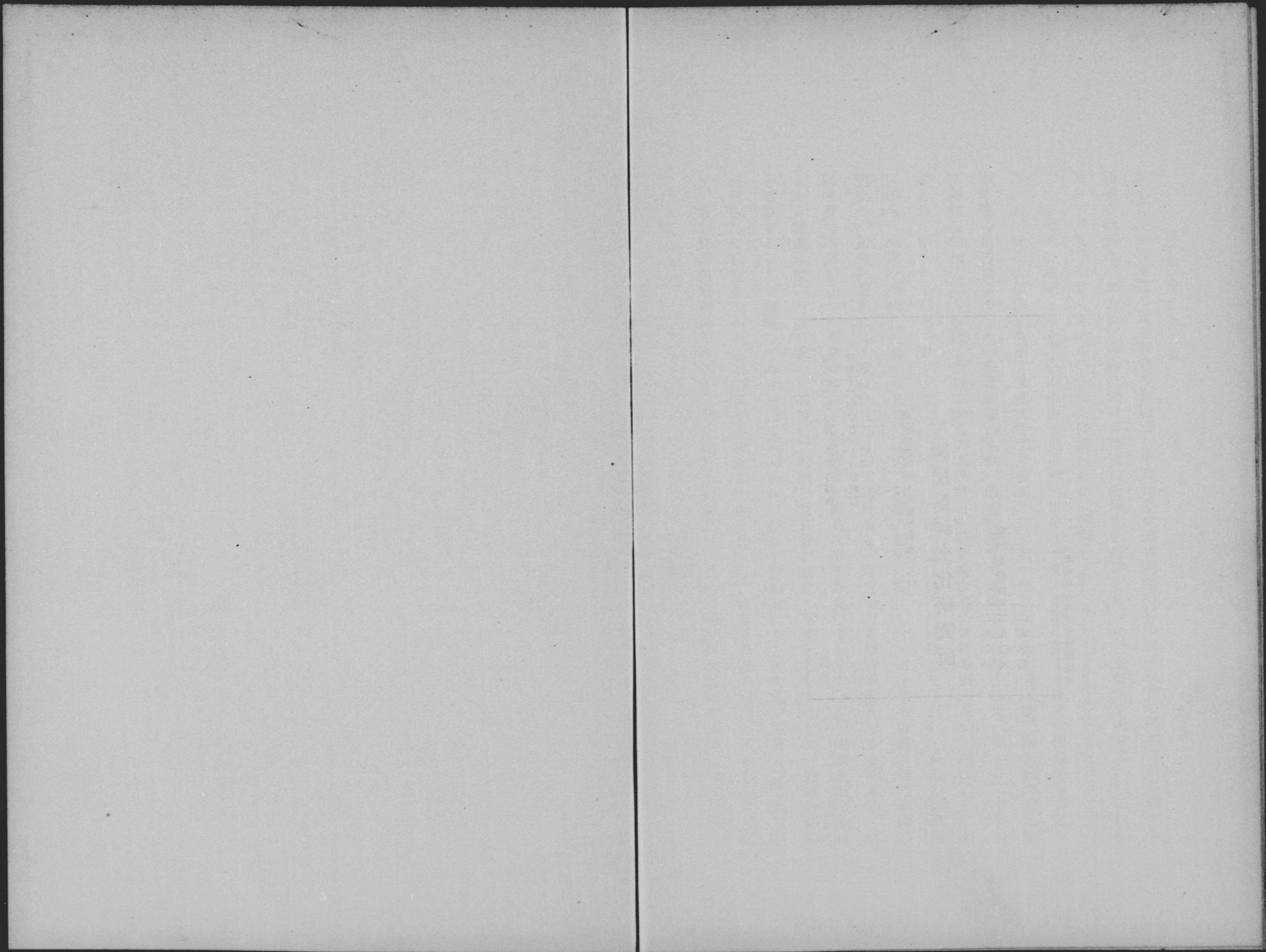
昭和十二年三月二十五日印刷  
昭和十二年三月二十八日發行

東京市品川區上大崎長者九二八四

## 國民精神文化研究所

電話高輪(44)  
二九〇一  
二九〇八  
二二六〇

(共同印刷株式會社印刷)





255  
147

